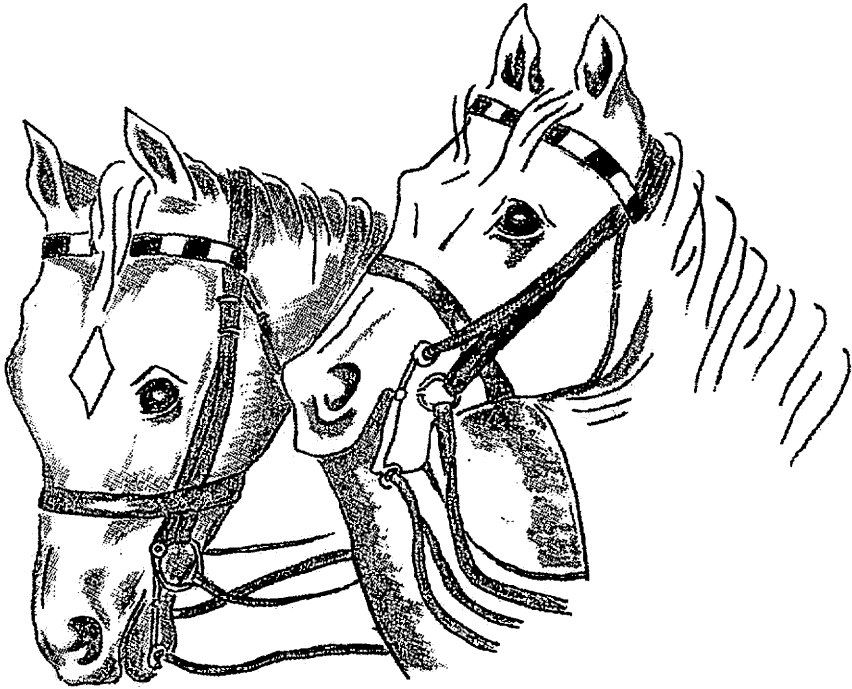


# 部 報

VIII

昭和37年度



北海道大学馬術部

## 目 次

1. 抱負及び雑感	八木正己	2頁
2 七人の侍	市川瑞彦	5
3 戦 績	水野佑亮	7
4 会計報告	三浦清一郎	18
5 会計報告	横田 肇	21
6. 岡山遠征記	八木正己	25
7 学生送手権	恩田正臣	28
8 無 題	清水 洋	32
9 無 題	志水一允	35
10. 街乗の記	八木多賀子	37
11 想うこと	原 重一	39
12 今年もまたかくてありけり	守屋 正	41
13 住 所 録		45
14 編纂後記	水野佑亮	46



# 抱負及び雑感

主持 八木 正己

八月のあわたたしい時期に前市川主将より引継いで、はや四ヶ月目ですが、何もわからぬままに、引受けて、最初その任務の大きさに不安な気持で一一杯でしたが、時と共に、どうやらその仕事に慣れてきたようです。

この間、夏期合宿、講習会、対帯畜定期戦、北海道団体選手権、国民体育大会、全日本馬術大会、全日本学生自馬對抗競技大会、秋期部内競技会、関東北女子戦、全日本学生選手権福島予戦と、数多くの行事があったわけですが、貸与馬試合では好成績を上げ、また自馬でも、今後の活躍が期待され、新馬（北瓊号と命名）も無事購入でき、都の財政は、現在非常に苦しい状態にはおかれていますが、部員諸兄姉及び先輩諸兄の協力のおかげで何とかやりくりすることが出来ました。

夏期合宿は試合日程がつまり、才二次合宿が六日間おまけに、雨に降られ正味三日間という私としては全く足りない位でしたが、充分な合宿が出来ず申し訳ないと思っております。だが今年、学生馬術連盟の御尽力により、三日間ではありましたが、中央より才

リンピック選手の川口さんがおいでになり、親切に指導して頂き、真の馬術というものはこうであるといふことを充分教えられました。馬術は力ではなくバランスである。新馬は如何に調教すべきか、障害調教はキヤバレソテイが有効である等々、我々には充分得るところがありました。今後はしばらく、北海道へは来ませんが、我々が積極的に働きかけて、川口さんなり荒木さんなり中央の先生方に来て頂くことは充分良いことです。就任以来初めての対外試合である対帯畜定期戦、北海道団体戦は、日頃の鍛練が物をいって、見事勝ちをつたことは、感慨深い思い出となりました。

岡山団体、全日本馬術大会、全日本学生自馬では、成績は良くありませんでしたが、馬術部繋養三年の北涼号が、学生自馬で、スチーブル、余力審査を無事通過し、我部としてはこ一、二年来悩みの種でした。自馬調教が芳しくないという点で、明るさを取り戻してくれましたことは収穫でした。

秋の部内競技会を今年はやらない予定でしたが、例年になく馬場の状態が良く、十一月二十五日、寒くは

ありましたが強行し、結構楽しく終えることが出来、結果としてやはり強行して良かったようです。

色々つまらぬ雑感を述べて参りましたが、その雑感の最後に一言つけ加えたいと思います。入部以来三年目、つくづく感じるのですが、これは、主将として、一役員としての両方の立場としてですが、運動部に入った場合我々は先ずある事を中心に決め、それを実行せねばならないということです。それは、馬術部の様な性格の個人競技の運動部においては特に要求されることですが、そのスポーツを、とにかく楽しむためにやるか、上達して楽しむと同時に競技に出場するために続けてゆくか、ということを先ずははっきりさせねばなりません。それによつて個々の人の部に対する比重も異つてくるわけで、それによつて部の責任者も相恋した処置をとることが出来るわけで、そうでなければ本人はもちろん、部の責任者も、感情的問題もかざんできて、非常に苦しむわけです。その点現在までに感ずるところ不明確だつたと思います。その例は上げるまでもありませんが、私としては、馬術を兼しみる役員として少くとも最低限度の義務は果そうという部員はいても構わないと思つております。運動部はただ単に、競技のためにあるのではなく、団体生活の中にあつて人間性の錬成というこのの方が重要であるとい

うことは、皆さん周知の事実です。それによる力の結果が競技で勝利を得るわけですが、また役員一人一人が何においてもあまりにも利己的になることは、神聖な部を破壊することになるということも、さらにつけ加えたいと思います。

それでは、つまらぬ雑感はこの位にして、次に我部に対する抱負、方針、或はそれに関連する問題について幾つか述べたいと思います。

先ずオ一に自馬育成について、今日岡山の団体、全日本馬術大会、学生自馬大会と全て始めより、終りまでこの目で観てきたわけですが、非常に印象に残つたことは、能力のある馬が沢山、しかも皿差でひしめき合つていたということです。一般自馬はもとより、我々学生自馬にあつても、今までの障害さえ良ければ、何とかなるだろうという考えは完全にくつがえされ、これらに対等に対抗するためには、障害は速いスピードで無過失で飛越できること、もちろん速いスピードといつても馬の沈静は保たれねばなりません。そして、馬場馬術は、北論かそれ以上でできないと、対抗できません。明治大学の豊藤、ミスロンクは、サンジョルジュ賞馬場馬術もある程度ヘミスロンクは全日本サンジョルジュで優勝しましたが、踏むことができます。

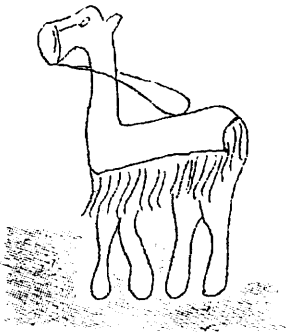
北倫でも今年の学生自馬で馬場の点教は中位でした。他の馬においては、ますます／＼いけません。アバラは硬く、口向きは悪く、そして硬く、多数の部員が新馬のうちから何人も文代で騎乗するので、増々悪くなつてゆくばかりです。適当な監督なりコーチなりがいれば良いのですか、それはここ当分の厚望み薄の様です。それで、この欠点を少しでも少くし、より良い乗馬に育てるためには、少々技術面で弱いのですが、我々学生部員が、最初より一頭の馬に一名或いは二名で、他の部員を乗せないようにして、一つの調教法で、一年なり、二年なり（少くとも）騎乗すべきです。何人かか乗つて種々まち／＼なことを要求されても馬は混乱し、反抗するばかりです。この方法は絶対に実行すべきで、他の部員も充分に協力せねばならない。この方法をとると、我部としては、新馬の多い折から数多い部員に非常に迷惑千萬なわけですか、一年先、二年先と将来のことを考えると、それは、一つの過渡期であつて、永い年月の間には必ずあることであり、その時の部員は後の部員にとつては大恩のある栄えある部員であるわけで、我々もその犠牲によることに先んじなければなりません。というわけで、非常に難しい問題ではあります。私としましては、来年度（三十八年度）早々より、この方針をとるつもりです。その点、部員諸

元姉には充分御考慮の上、賛成して頂きたい。続いてオニは来年度よりの対外試合及び練習方法について、心を開きたいと思ひます。以前より部としては、対外試合の急には新馬もある程度犠牲にするという方針をとり今日に到つておりますが、私としましてはオニの方針で述べました様に、試合の爲の強化練習において新馬に何人もの人間が入れ替り騎乗することは、人間が疲れるために扶助操作が粗雑になり馬といたづらに争うことにより、馬をして反抗心を起させ無理な要求に対する逃亡をいつも企てる結果になり、口向きを悪くし、アバラを硬くし、多くの悪いクセをもつようになるわけです。近年貸与馬競技よりも自馬競技の盛んになつて来た折から、私としてはオニの方針を強く守りたいと思つております。もちろん貸与馬競技を捨てるとはいつておりません。それに対する練習方法はまだ充分あるはずで、それは実行することによつて示したいと思つております。そして対外試合（貸与馬）においても、過去の成績に恥じないよう努めるつもりです。強化練習以外でも下級生部員の強化の爲に定期的に練習日を設けるといつた方法をとる予定です。各部員も騎乗するときたこえ五分か十分であつても充分得るところのある乗り方をして欲しいものです。それには同学年で話し合うとか、上級生の話を聞くか或い

は、教本を説むといつたふうには、常に研究心（或いは探求心）をもつて望まねばなりません。もちろん学問の方を首肯にしましては、何にもなりません。

だいたい以上で、私の今後の部運営に対する方針のアウトラインを述べたわけですが、最後に一言つけ加えたいことは、現在農場の一部（三分の一程）が総合グラウンドになるため、部と農場との分離、移動という事実が具体的に進められているという事実に対して、今の一、二年目部員はもちろん、今後に入つて来られる部員諸兄は充分胸心を持ち心して頂きたい。

それでは先輩諸兄姉及び現部員諸兄姉、来年度（三十八年度）入部される部員諸兄姉の多大な御協力と御指導をお願い致しまして、結びにさせて頂きます。



## 七人のさむらい

市川 瑞彦

期待と興奮で体中の血が走り回っていた。  
東京にもこんな静かなところがあったのでしようか  
というアナウンサーの声が聞えてきた。馬事公苑の紹介  
であった。四年間、見なれた顔、聞きなれた声を、エ  
レクトロニクスの技術はとんだふうには目の前まで運ん  
でくれるだろうか。考えた。しばらくすると写った。  
写った。なんと、実に堂々としているじゃないか。  
息づまるような緊張感も、悲愴感も、彼等の表情から  
は見られない。お互いに信頼し合つて、期待している  
部員、先輩に報いようとしている意欲が、何の障碍も  
感ぜず（克服したのかも知れない。）伸々と出ている  
じゃないか。マイクには聞きおぼえのある声援が聞え  
てきた。例の調子のいい時には必ず出る。身分を確  
かめ、馬を元気づける声も聞えてきた。よし、何と言  
うことがなかった。煙草に火をつけて、ゆつくり点数  
がひらいていくのを見入った。部旗を先頭の行進。日  
頃は部室でほこりをかぶっているヘルメットも見える。  
まだ名前もよく憶えていない。だが、いつも手を触れ

たくては方がなかつた優勝杯。先輩の悲願だった、大ざくらずつしり重いヤツだ。今度は優勝旗。またカット。この時にはじめて、彼等の中に緊張した、ちよつと歪んだ表情を見た。私はこのテレビの画面の中に、部員全員が望み、計画し、参加し、ついに完成した彫像を見る気がした。それも、とても大きなヤツだ。

全体の熱意を十分に受けとめ、指揮する能力もなく、加えて怠慢な私の首に縄を結び引つ張つていつた全体の意志がこの作品を完成したのだ。彼らが引つ張るのはワラ人形でも同じ結果は得られたらう。だが、画面の中ではなほなく活躍した。七人の侍も、自分は粟を食つても彼等には米の飯を与え竹槍を握り、地味な存在になりきつて、侍の動きを浮き彫りにした百姓達が居つたればこそだ。部員諸君を百姓にたとえたのでは失礼かも知れぬ。だが私は、今、少しでも参加し、侍達に協力した一百姓として、誇りを感じている。

窓の外はほたむ雪が舞い立っている。馬に乗れなくなつてから、もう五ヶ月も経っている。七月の半ばに、不注意に結核と診断され、最も大切な時期に何一つ出来なくなつてしまった私にとつて、残念ながら、主将としての一年間を具体的に総括することは出来ない。

この点だけでも主将失格だったに違いない。馬から遠ざかることは寂しいことである。馬は乗ることをやめた者からは、容赦なく遠のいて行く。養養ほけした頭で馬を、部生活を遠くから眺めた。雑感のようなもので許していただきたい。

馬術は人間の精神が馬の意志と力学を支配して行う創造だ。ベットの上の生活が慣れてくる頃には、力学と馬の結びつきとでも言うか、具体的な何か鞍上でだけ生ずるような結びつき、鞍上にあるものだけを通じ合うような内容から次才に離れてしまい、アドバイスも十分出来なくなつた。しかし、半面馬から離れることによつて、馬に乗つているときの精神状態の方は今迄よりもずうつと客観的に反省することが出来たような気がするのだ。自分の意志すら明確になつてもないのに馬に明確な動作を要求したりはしなかつたか。それが失敗して腹を立てて、馬に八つ当りをする。かいぶんそんなこともあつたように思う。自分のおせり、虚栄心、気負いから、かいぶん馬に迷惑をかけた。馬はどう解釈したらよいかもわからず、ただおどくしていただろう。又私は耐える。物事が明確になつてくるまで勝手な推断、解釈をせず我慢するということを学んだ。新馬に乗つたときには、乗り終つた後でいやというほど知らされた。皿の気が多いといえは聞

えがよいが、馬乗りは血の気という単純なことで片付けられるものではないのだ。自分自身をきたえろといふことは、肉体的な苦痛に耐えるときのみ達成されることではない。こういうことが、皮肉にも馬から遠ざかって始めて、スポーツ懸章の目的にある文字としてではなく、自分の聖験と実感から得られた、だから部員諸兄に望みたい。馬術こそはスポーツの本質を、肉体的・精神的両面において備えたものであることに誇りを持つて、その中心たる精神的なものを常に高めようと努めることを、運動部に所属している意味を積極的につかまれることを。

一軍前には夢でしかなくかつた馬場に砂を入れることが表現した。ほこりだらけで息もつけなくなるようなこともないだろう。馬も人間も鼻の穴をあればほど真黒にしなくてもよくなるだろう。雨の日に長靴を泥で塗りつけなくても済むだろう。我々の夢を實現させてくれた岡田先輩、学庄部の方々、それに初めから責任をもつてやつてくれた志水君に感謝しなければならぬ。

勝つことは難しい。これをつくづく実感したのは固

立七大学定期戦だった。全員の意志を尊重し受け入れ且つ勝利を手中に収めることが出来たらどんなによいだろう。だが、勝負はやはり厳しい、私は勝つことを送んだ。勝つことをオ一の目的にした以上、必ずどこかに否が生じていたに違いない。でも、よくこれに耐えて無言のうちに協力してくれたと思ふ。事実私自身、何ら具体的に参加しえなかつたので心苦しくもあつた。或いは、こんなことを言う資格がなかつたのかも知れない。でもやはり勝つてよかつた。この大会を参加校全部の部員から満足して帰つて貰えたのは、二年間に亘つて大会準備を一手に引き受けてくれた、原、藤田両君によることが大きかつた。非常に傍観者の立場で申し訳けないと思ふが、運動部の意味は、規律、目的が必ず存在しているのであるから、内在しているいろいろな何人的な問題をうち明け、話し合い、納得してもらつて解決していくところにも他では得られない意義があるように思ふ。

自馬大会の惨めさも忘れることができない。だが、惨めなどん底（そう思いたし、そうさせねばならぬい。）から希望を持つて新しい馬も顔を出してきた。先にも誓いたが、新しい馬を育てるには何よりも耐え



我慢することだ。じつと落ち着いて時を持つことだ。北寮号に希望が持てるようになってきたことを喜びたい。川口宏一氏の来部も我々のこれからの指針に多くの示唆を与えてくれた。如何にも単調な、じつと冷静に馬を見守る態度が、やはり一番の正道であることを教えてくれた。我々の目の前で、又我々の練習方法にも自信を持つてよいことがわかつたのも大きなことだ。現に王決でも実証されたのだから。鬼田君による北飄号の調教も、彼の熱意で順調にいっているのも、これからの大きな希望だ。私の乗っていた北翔号は途中で放り出すようなことになってしまい、部員諸君を落胆させてしまったが、幸い志水君が後を引き継いで、私よりも着実に進めてくれているので、心強い。私もこれから、体が許せるようになれば、何らかの形で少しでも、彼に立つていこうと思ふ。その他、原君が乗っていた北揚号の障碍飛越の進歩も目覚ましいし、決つて見通しは暗くない。更ら今年も部員諸君の労力で素晴らしい北環号も致着した。着々と前進しつつある。候は着実、冷静に調教することあるのみだ。来年からは自馬の方面でも一歩一歩前進しようじゃないか。

私が最も嬉しやと思つてゐることは部内の雰囲気である。昨年の部報にこのことについて述べたことを憶

えているが、部員諸君全員が実に活動的で伸々としてゐるのは何よりも大きな成果だ。時々私自身彼等の熱意に比べて恥しくなることがあつた。本当の意欲は押しついたり、命令したりすることから生れないのだ。一人一人が、目的を認識し、自分の行動の意味を見出して初めて出てくるものなのだから。私はいろいろ、よろめいたり、つまずいたり、喧嘩をしたりしながら、自分を主張し、話し合い、解決してきた。七人の狩はやはり *magnificent seven* であつたと思ふのだ。このような雰囲気はこれからの部員諸君に是非續けていつてほしいと思ふのである。実に恒性的で、ユゝモラスな面と、いざとなつたときには逞しいところも見せてくれた彼等。弱さと強さが同居して実に人間味があつた彼等。また彼等にはなほ新しい勝利を与えた部員全員も *magnificent* だ。その中にこそ、私のような人形もいてよかつたのだ。

遂に一歩も行うことが出来なくて残念に思つてゐるのは、基本馬術などについて、全部員で疑問を出し合ひ研究し合う機会がなかつたことだ。これは常に中央の情勢を把握したり、地理的なハンディキャップを埋めるためにも是非行う必要があるものだから、今度の新しい部の運営スタッフに実現することを要望したい。

この御術などについての知識は我々は少し足りないのではないだろうか。我々の先輩は非常にこの点について豊富なものを持っておられたと聞いています。

私は今、自分ほど幸せなものはないと、つくづく感じていいる。私自身何もしなくて、代りに黙々とやってくれた持産がいたのだから。副将の恩田、堀川両君はいつも練習のときには私の代行をしてくれた。今年の王沢出場の合宿、練習の指揮をしてくれた堀川君は見事に責任を果して、帰ってきた。又、恩田君は名譽な最優秀選手になった。当然報いられてよかった。両君に讃辞を惜しまない。飼育の清水君にも御苦勞さを言いたい。彼の積極的な飼育には私も考えさせられた。

私も、今は春になって、体が治れば、やつてみたいことで一杯だ。今年は何らを知りつゝ、一つ一つ、私のために、部のために、しつかり締めくくりをして部を卒業したいと考えている。私もかつては侍の一人だったのだから。

# 一九六二年度

## 戦績

記録係 水野佑亮



○東京遠征 三月十八日—二十七日

シーズン前ではあるが、雪の上で数日強化練習を行い福島と東京で親善試合を行った。

対戦校は、福島大学、早稲田大学、麻布獣医科大、関西学院大学、学習院大学で勝ったのは対福島大学戦だけという余り良い成績ではないが、中央の大学の実力を知る事が出来、馬を知ることが出来たのは大きな収穫であった。

参加選手、恩田、志水、堀川、岡田、高木、小島  
三浦

○対帯広畜産大学春季定期戦

五月二十日 於畜大馬場

シニア戦 北大 123.25 ———— 326.00 畜大  
ジュニア戦

畜大 173.50 ———— 311.25 北大

シニアはオール四年目で臨み兼勝。、栄光への脱出。の兆しが見えはじめた。しかしシニアは経路違反が大きく響いて敗れる。

出場選手

北大 鬼田、堀川、原、岡田、志水、市川、

八木、田村、高木、小島、萩原、滝沢

畜大 川久保、塚本、秋山、立川、齋田、

五郎谷、畠山、都築、佐々木、真野、

湯藤

対札幌鉄道管理局定期戦

五月二十七日 於北大馬場

札幌 15225 ———— 16609 北大

出場選手

北大 小島、八木、高木、田村、岡田

札幌 穴田、田中、新矢、山本、柳浦

対北大乗馬同好会定期戦

五月二十七日 於北大馬場

馬術部 120325 ———— 16600 同好会

出場選手

馬術部 原、清水、堀川、志水、鬼田

同好会 岡田、正島、半沢、杏藤、小山

対酪農大學戦

五月二十七日 於北大馬場

酪農 15225 ———— 16600 北大  
出場選手

北大 萩原、大木、松永、滝沢、水野

酪大 古庄、志賀、高橋、小出、川内

札幌には少差で敗れ、同好会には大差で勝つ。

酪農大學とは初めて親善試合を行った。目馬であ

りながら一食い、四食われで、まさに惨敗した。

「技術的に劣つてはいないが、フアイト不足だつ

た」というのが観戦者の意見の一致した点であつ

た。今年からは定期戦になるであろうが、決して

負けてはならない試合である。

東北 北海道学生馬術選手権大会

六月三十日、七月一日 於福島競馬場

予選(A、Bブロック毎の通し騎乗により四枚送抜)

Aブロック

岩手大 岩手医大

北大 岩手大

福島大 北大

Bブロック

北大 宮城農大(1667)

北大 北大(116)

酪大 帯広畜大(1235)

決勝リーグ

	北大	東北大	岩手大	畜大
北大	○	○	○	○
東北大	×	○	○	○
岩手大	×	○	○	○
畜大	×	○	○	○

一位 北大  
二位 岩手大  
三位 帯広畜産大  
四位 東北大

この結果、北大は二年振りに全日本学生馬術王座決定戦の東北・北海道地区代表となつた。  
北海道馬術大会

七月七日・八日 於帯広競馬場

自馬複合

参加 市川(北凉) 志水(北榆) 原(北楊)

堀川(北嶺) 高木(朝清)

一位 鎌田(札幌クラブ) 洋孝号

自馬中障礙

参加 岡田(北楊) 三浦(朝清)

清水(北凉) 堀川(北嶺) 八木(北榆)

原(北楊) 小島(朝清)

一位 立川(クモキリ)

婦人、少年障礙越

一位 森本(畜大) 二位 滝沢(北大)

三位 寺江(北大)

一般貸与馬

参加 原・志水・市川 田村・荻原・高木

鬼田・八木・野田・滝沢・岡田・滝沢(通)

小島・堀川・清水・三浦・水野

一位 井上(帯広乗馬クラブ)

二位 田中(札幌乗馬クラブ)

三位 鎌田(全右)

自馬六段越

一位 都築(竹若)

二位 市川(北嶺)

才一回 国立七大学総合体育大会馬術競技

(旧称 才二十回帝大戦)

七月二十九日・三十日 (於北大馬場)

一位 北大 二位 名大 三位 東大 四位 九大

予選 Aリーグ

名大 152.50 東北大

東大 128.50 東北大

東大 109.00 名大

予選 Bリーグ

九大 125.00 北大

北大 122.50 東大

九大 108.50 東大

決勝リーグ 北大・東大・名大・九大

結果 東大 -649.75 — -719.75 名大  
 名大 -67.00 — -74.25 九大

	北大	名大	東大	九大
北大		○	○	○
名大	x		○	○
東大	x	x		○
九大	x	x	x	

北大		東大	
清水 16	朝霧 62	池田	
堀川 155	神風 135	徳田	
玉沢 14	北翠 170	吉田	
志水 0	洋孝 0	菅野	
恩田 8	北嶺 135	河野	
八木 0	北家 4	中島	
-53.5		計 -263.75	

名大 -231.25 — -259.75 東大

北大		名大	
高木 0	広風 0	加藤	
鬼田 11	北翠 13	水野	
志水 194	北樹 194	堀田	
小島 6	北楊 6	塚本	
堀川 7	神風 0	高尾	
王沢 54	北翠 17	越	
-272		計 -290	

北大		九大	
八木 6	北涼 0	氏原	
恩田 22	北嶺 182	上野	
原 9	岸花 196	三塩	
三浦 25.75	朝清 30.25	村山	
清水 7	洋孝 19	美山	
堀川 170	立山 222	八	
-239.75		計 -649.25	

今まで帝大戦として各運動種目別にまち／＼に行なわれていた試合を今回から総合して、一つの大学で同時に行うことになり、才一回は北大が当番校となった。

馬場は一期の合宿でトラック三十六台分の砂を入れたかいあって、試合前数日降った雨にもかかわらず良いコンディションであった。

予選リーグでベルの鳴る前にスタートを切る失敗があつて九大に敗れ、決勝進出が危ぶまれたが、次に京大が九大に敗れ二敗した為、どうにか進んだ。しかし決勝リーグでは実力を発揮して全勝優勝した。

才五回招待全日本女子学生馬術大会

八月二日・三日 於北大馬場

団体（二名戦）

一位 麻布獣医科大学

二位 学習院大学 A

三位 帝立畜産大学

参加チーム

麻布獣医科大学・学習院 A・B 青山学院 A・B

帝立畜産大学・福島大学・北大 A・B

個人

一位 滝沢（北大）

二校 鈴木(青山)

取調賞 芥藤(学習院)

参加選手は団体戦出場の大学の他、岐阜大学、

東北大学、法政大学から一名ずつ参加し、

計二十八名

北大選手は、寺江、滝沢、牧、八木の四名

団体はA・Bチーム共に予選で敗れた。Aチームは麻布大と同率でありながら食い散で敗れたのは惜しかった。麻布大が優勝しているからなおさらである。個人戦決勝は滝沢(北大)、鈴木(青山)が北嶺号に乗って競った。鈴木は慣れない馬場のせいかバンケット横の楡の木をよけた際に落馬し優勝は滝沢のものとなった。

試合の前に雨天が続き馬場は悪かった。特に二日目個人戦の時には又降り始め激しい雨の中で試合が行なわれた。去年の例もあつて事故が心配されたが各選手は雨を蒸発させればかりのフアイトでドロドロの馬場を駆けめぐつた。真白な手袋も上夜もズボンも何もかも泥がはねてだいなしである。審判も一般観戦者もその猛烈なフアイトにだ目を見はるばかりであつた。大した事故もなく終了したのは幸いであつた。

対精々畜産大学秋期定期戦

九月十五日 於北大馬場

シニア戦

北大 1-22-27 | 1-22-27 畜大

ジュニア戦

畜大 1-20-25 | 1-20-25 北大

出場選手

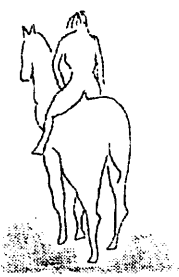
北大 八木、滝沢、三浦、高水、荻原、小島、野田

大木、松永、水野

畜大 中原、浜野、畠山、湯藤、川久保、佐々木

氏向、都築、秋山、丸田、児玉

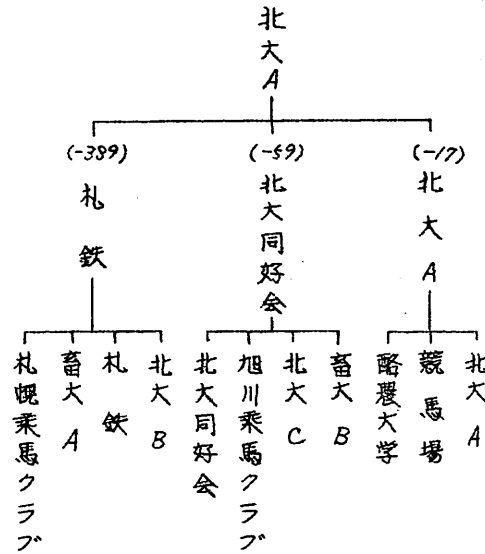
今度は四年目が退き、新しいメンバーで戦つた。結果は春と同じように、シニアは衆勝、ジュニアは又経路産反をやり惜敗した。経路産反といえども実力の表れであることを反省している。



北海直馬術団体選手権

九月十六日 於北大馬場

優勝



北大選手

A (八木・恩田・高木・三浦・小島)

B (松永・田村・滝沢・大木・荻原)

C (原・清水・志水・岡田・堀川)

今回から旭川乗馬クラブ、酪農大学が新しく加わり全部で7チームと、大規模な大会になった。

下は札幌乗馬クラブの高校生から上は旭川乗馬クラブのお耳寄り(失礼)まで一緒になつて競い合う大会も珍しいのではないだろうか。北大馬術部からは、A、B、C三チームを繰り出して戦つた結

果三年目を主力とするAチームが優勝した。北大馬術部の初優勝である。

才十七回国民体育大会

十月二十二日→二十六日 於岡山大学

一般自馬複合、一般自馬中障礙、一般自馬六段に堀川選手(北嶺)が出場したが、いづれも失権し順位に入ることはできなかった。

一般賞子馬中障礙

優勝 北海道チーム

田中(札鉄)、八木(北大)、小出(酪農大)

才十五回全日本馬術大会

十月二十七日、二十八日 於岡山大学

サンジヨルジユ賞 馬術競技

八木(洋孝)

中障礙 甲

八木(洋孝) 9位

高木(北嶺)

六段

恩田(北嶺)

才五回全日本学生自馬對抗競技会

十一月一日、二日 於岡山大学

調教審査 持久力 余力

北大チーム	岡田(北嶺)	1-105.2	1-122	海嶽
	志水(北楡)	1-25.9	海嶽	海嶽
	清水(北萩)	1-111.5	1-216	1-60

以上岡山で行われた三つの大会の内容は、八木主将が遠征記を書いておられますからそちらを御覧下さい。

### 才八回関東北女子学生馬術大会

十一月十日、十一日 於福島競馬場

#### 団体(二名戦)

一位 北大A 二位 豊大

#### 参加チーム

青山学院A・B 日大 福島大A・B 法政

北大A・B 帝畜大A・B 麻布獣医大 豊大

#### 個人

一位 高尾(青山) 二位 渋谷(青山) 三位 吉岡(福島)

北大選手 寺江・滝沢・牧・八木

にはか作りではあつたが、未明から霜を踏んで行つた強化練習のかいぢつて団体で優勝した。

今回は、男子部員の監督、コーチ等は一切なく、選手四人だけで遠征してこの成績をおげたのは頼もしいことである。

### 対東北大定期戦

十一月二十九日 東北大馬場

北大 1-1036.25 1-1300.5 東北大

#### 出場選手

北大 恩田・志水・小島・大木・萩原・野田

滝沢・水野

東北大 横山・吉田・吉田・甲田・芳賀・大塚

榎波・渡辺

うらかな暖かい日で馬場のコンディションもよく、試合には最適の日であつた。馬場は狭かつたが、この試合の急に抜け、又新しい障碍も作つてあり、歓迎の心づくしに一行は感謝した。

試合は福島へ行く途中、コーチとして同行した四耳目も参加して八名戦で行われた。審判の注意の誤解からスタート前一分の失権があり、勝利の行方が危ぶまれたが、それがかえつて皆の気を引きしめたのかよく戦つた。

レセプションの席で、この定期戦を、シニア・ジュニアに分けるとか、女子戦をやるとかして、ちつと巾をもつたものにしたという意見があつた。さつそく今年から実行すべき事だろうと思ふ。



才五回全日本学生馬術王座決定戦

十二月十四日・十五日

於東京馬事公苑

一位	北大 (北日本代表)	四勝〇敗
二位	関学 (関西代表)	三勝一敗
三位	農工大 (関東代表)	二勝二敗
四位	金沢大 (中部代表)	一勝三敗
五位	熊本大 (西日本代表)	〇勝四敗

才一日目

才一	合 関学	1-22.25	熊本
才二	農工大	1-24.25	金沢
才三	北大	1-32.25	熊本
才四	関学	1-22.25	金沢
才五	北大	1-66.00	農工大

才二日目

才六	合 金沢	1-20.20	熊本
才七	関学	1-25.25	農工大
才八	北大	1-56.50	金沢工
才九	農工大	1-22.25	熊本
才十	北大	1-20.00	関学

最優秀選手 恩田 (北大)  
最優秀馬 栗早 (農工大)

北大関係分の詳細

才三試合

北大	丸並石原田松	林川川武瓜田
早替花竜	17	14
栗白桃白	26.5	0
早替花竜	10.5	15.5
明	33.5	
計	-322.25	-288.00

才八試合

北大	村口崎本口野	松二川松武関
松二川	3	89
松二川	129	18
松二川	23.25	23.25
松二川	6.50	
計	-158.50	-269.25

才五試合

北大	石平谷畑中崎	大中大江田岡
青原	10	3
田	31.9	0
水	25	29.3
川	26.5	
計	-661	-700

才十試合

北大	前下一平田橋	神竹楠奥前高
清水	0	0
水	0	3
川	0	11
田	0	18
田	0	0
田	17	35.25
計	-20	-67.25

昨年の、いや、ここ数年来のトップニュースである。北大は初優勝であるが、三年連続北海道へカップをもつて来たのは愉快である。尚試合の経過・内容は堀川チーフの遠征記をお読み下さい。

才三十四回 全日本学生馬術選手権大会

乙種馬場馬術競技

十二月二十一日 於宮内庁馬場

志水一充 十三位

得点 松緑 185.67  
谷誉 164.00 半 349.67

恩田正臣 十六位

得点 水晶 191.00  
光朗 145.67 半 336.67

一位 松平頼典(成蹊大) 得点

障碍飛越

十二月二十二日・二十三日 於馬事公苑

恩田正臣 二位

一位 丹羽良三(中央大)

馬場でもぐんと躍進したか、障碍のこの成績は、今年度の輝かしい戦績にさらに一段の輝きを与えた感がある。この大会の模様も恩田選手の遠征記を御覧下さい。

以上今年の戦績をまとめました。特に他所で行った試合は大まかで、不正確ではありますが、おゆるし下さい。

全体を見て感ずるのは、賞与馬では最高と言つてもいい所まで行つたが、自馬ではこのところ下降線をたどっている事でしょう。

しかし現任・新馬の調教は着々と進み、来年度からは自馬でも急勾配の上昇線を画いてゆくであろう。



# 36年度会計報告

三浦 清一郎

## 収支概要報告表

12月 1月	収入	前月繰越金	8,584
		部費	8,250
		30年史代金	2,800
		撮影バイト その他	12,060
	支出	30年史発刊記念会準備	1,500
		映画会に関する諸雑費	4,270 + 980
		備品雑費	5,210
	小計	(差引)	19,734
2月 3月	収入	部費	5,750
		映画会(純益にあらす)	60,427
		30年史代金	4,100
		その他	270
	支出	映画会雑費	2,920
		30年史発送費	13,950
		親善試合遠征補助支出 (東京での馬具購入費も含む)	8,720
		備品雑費	4,700
		その他	790
		えんばく購入	17,200
	小計	(差引)	42,001
4月 5月	収入	部費	15,250
		新入生部金	12,800
		講習会費	21,600
		30年史代金	1,200
		その他	980
	支出	講習会雑費	2,090
		新入生歓迎会	1,000 + 475

会計報告

	支出	東京講習会援助費(2名)	5,400
		30年史発送	720
		備品雑費	9,570
		その他(部内競技会あり)	2,400
		えんぱく Ca	15,200
	小計	(差引)	56,966
6月	収入	部費	17,250
7月		新入生入部金	1,600
		札幌祭アルバイト	25,070
		その他	1,220
	支出	東北、北海道王決手送遠征補助	28,000
		直大会に関する諸雑費	17,520
		直大会参加費立替、その他 (対個人貸出未返済分)	10,270
		備品雑費	7,890
		その他	1,700
		部費慰労費 (例外的に支出が大きかったので独立の項目とした)	5,500
		えんぱく、その他	12,030
		南大戦に内する諸雑費 (36年度会計より支出した分のみ)	2,090
	小計		17,636.00

1962年7月31日現在 残金 17,636.00

36年度会計報告(12月以降)は大体以上の表の如くであります。これに關した若干の説明及び注釈を加えて置きたいと思ひます。

1. 30年史は、印刷費の支払を済ましたあとは 部会計に繰入れて発送、その他の事務を行いました。
2. 2月の映画会の純益は、55,000円を一寸割りました。
3. 札幌祭のバイトにでた部員には、部費で環元しましたが、この表の上では二重の収入として、つけてあります。
4. 東京講習会では、旅費(急行券代含む)が支給されたので、支出が昨

年度より少なくなっております。

表からもわかるように、状況が変らなかつたのは、えんばくに関する大きな支出であると思う。

昨年度の赤字を考慮して、札幌刑務所から購入してみたり、色々な手を打つてみたものの、結局は百万を越える支出となつてきているのである。

来年度は、農場と悪術部という、状況の中での困難なえばくの向題が、その極に達するであろうと思われる。少くとも二度にわたる映画会を必要とする大きな数字なのである。学生部移籍という向題の一つのポイントもここにあるのだと思われる。

又、相も変らず、昨年度と同じ反省になるのではあるが、滞納と個人への貸出の問題である。

滞納の面では、2、3の大口を残して大体前年度未納金の解消にまで、こぎつけたものの、個人の借金の未返済には、全く頭痛ハチマキである。オ1の型は、独立会計を委託したものが、その会計報告を急つて、残金を会計まで戻さぬ場合である。

オ2が、臨時収入やその他を会計の手まで戻さずにいる場合である。

オ3が、会計が認めて、遠征費等を都合したものである。

これらが何と、3万5千円を越えているのである。

東北、北海道の遠征補助費 10,000強

道大会参加費 10,000強

等々の金の使途が会計に届いていないのである。運営方法の問題、組織と個人の問題として再考慮される必要があると思われるのである。

尚、今年度会計としては、個人貸出を2度しか認めていず、それ以外はすべて会計の承認を得ていないものである。だから7月31日現在の残金は、額より6,000円ほど、少なくなつている。

今年度は、遠征も行事も大きく、多忙な年であつたと思うが、どうにか、借金もせずに切抜けてこれたのは部員諸兄の協力と、特に半沢先生、有藤先生、生協の佐合さんの御助力が実に大であつたと思う。

30年史の件では、東京のB会の樋口さんと、北大の有藤先生に何から何までをしえていただいた感がある。又、備品の整備に関しては、同好会の佐合さんにずいぶん無理なお願ひをしまして、全く申し分けなく思

っております。

どうか、今後ともよろしく御忠告いただけますようお願いして、新会計の横田君にバトンを引き継ぎたいと思います。

## 37年度会計報告 (中間報告)

横田 肇

### 新馬“北瓊号”(ナグサ号)に関する決算

収入の部	
9月の競馬場アルバイト	34.000
10月 " "	37.800
先輩からの寄附	
{ 佃人(12人)	12.000
{ 東京OB会	3.500
小計	87.300
支出の部	
北瓊号(ナグサ号)	60.000
函館よりの運送費	
{ 村添人	1.000
{ 貨車輸送	2.500
電信急替料金	520
礼金	5.000
小計	69.020
差引	18.280

会計報告

次に9月から11月までの収支を報告する。

月	収 支	摘 要	金 額	備 考
8	収 入	7月からくりこし	14,382	
		部費 その他	3,750	
		才二次合宿残金	140	
	小 計		18,272	
	支 出	備品、雑費	2,130	
		連盟派遣費	1,000	
川口先生講習に關する 雑費		990		
貸 出		2,000		
小 計		6,120		
差 引		12,152		
9	収 入	8月分繰越	12,152	領收証、又は報 告を受けとつて いないものは貸 出しとした。
		部費 その他	24,000	
		競馬場アルバイト	34,000	
	小 計		70,152	
	支 出	備品 雑費	2,853	コンパ費用3,000 円をたてかえ、 2,700円もどつ たが未だ未納者 のあるため。
		エンバク	2,550	
		七帝戦、女子戦の雑費	2,430	
		道大会参加費	2,000	
		写真札弁償	31,000	
		貸出し(ハガキ、切手) (ホンプの柄)	3,000 200	
(コンパ費用)		300		
小 計		44,333		
差 引		25,819		
10	収 入	9月分繰越金	25,819	競馬場アルバイ ト装蹄試験アル バイトは1回、 100円として部 費に還元した。
		部費 その他	15,500	
		競馬場アルバイト	37,800	
		装蹄試験アルバイト	2,200	
		団体に關する収入	50,671	

会計報告

月	収 支	摘 要	金 額	備 考
	小 計		132.000	
	支 出	備品、雑費	9.246	
		国体、学生自馬に関する支出	35.651	
		アルバイト還元	17.900	
	小 計		62.793	
	差 引		69.203	
//	収 入	10月分繰越金	69.203	
		部費 その他	11.700	
		新馬に関する寄附	15.500	
		体育会より	6.000	
	小 計		102.403	
	支 出	備品、雑費	4.050	
		部 旗	4.000	
		女子戦派遣費	8.000	
		北瓏号(ナグサ号)	60.000	
		対東北戦、学生選手権 予送派遣費	20.100	
		貸 出(写真)	3.300	
	小 計		99.450	
	差 引		2.953	

本年は昨年に比べて非常に多くの支出をきたしている。先づ8ミリカメラの弁償である。農学部より借りたのが盗難に会いその弁償金31,000円ただでさえピーピーの部財政なのにこれだけの大金を出さねはならなかつたのは今もつて残念至極である。

次に遠征費である。本年度は秋になつてからの遠征回数が多く従つて遠征費もかさんできている。国体、学生自馬、関東北女子戦、対東北戦、学生選手権予送、12月に入つてからは全日本学生王座決定戦、学生選手権があり、これらの総額は10万を上まわるのである。これに“北瓏号”(ナグサ号)購入費が約1万、かくの如く8月以降主なるものだけでも20万、諸雑費を入れると25万の大金を支出しているのである。

収入の面について少し触れてみる。



収入の面について少し触れてみる。

部費は月 250 円だから理論上月ノ万、4ヶ月で4万。これだけではどうしようもない。部費を倍にしたところで大した収入とはならず、又部員にとっては苦しいことおびただしい。従つて部費の倍増は不可能に近く、アルバイトと先輩の寄附が予想以上に大きな比率をしめるのである。

ここで又出費のことを書いて恐縮であるが、12月13日現在サイフは全くの0に等しい状態である。否実はいマイナスなのである。払うべきものも払つてないのが2、3ある現状、しかも来年4月までに必要な費用をみつもつたところ、この部報を発行するのに1万5千、卒業生に贈るメダル1万2千、2月に行う映画の税金3万2千、東京の講習会の旅費1万等、雑費を入れると9万は必要である。部費からの収入は4万程度だから2月の映画会で金づくりをうまくやらないと、このやりくりさんだんも首がまわらなくなりそうだ。

このやうに例年どおり火の車、毎年毎年火の車だから部員も不感症になつていつこうにせつばつまらなくてはいつもせつばつまっているのだが、金づくりに熱を入れない結果となつている。この問題を打開していくために会計の方針として、①部費滞納を一掃すること、②合理的なアルバイトを増やすことである。まず滞納の件。

我々が例年部に入つてきてまず驚くのは部費の滞納である。上級生ほど滞納している。下級生の手本たる上級生がこのサマだから新入生誰しも「部費は滞納してもいいんだな」という感じを潜在的にもつてしまう。かくして彼等が上級生となつたときこのくりかえしをするのである。おそらくは馬術部復活以来の悪癖であろう。毎年会計がこの滞納に頭を痛め結局解決できぬままに今日に致つてきたが、これからますます部財政が困難になる以上ここで一掃せねばなるまい。

幸なことに現在の三年目以下は割合に滞納が少い。そこで来年4月より部費3ヶ月以上滞納のものは騎乗停止という強い線をうちだしたわけである。最近徐々に滞納が減り新年を迎えて各自オトシダマも入ることだから、長長の悩みであつた滞納もこの3月を以つて解決できる見通しとなつた。アルバイトの件。2月に映画をやるのだがなにしろ1年ぶりのことで相当準備に苦勞しているが、あるていどの利益は10分期待できる。今後は毎年3回ないし4回の映画会なり、ダンスパーティーなりを行うことにならう。部員の財政に対するフアイトを所望するものである。何はともあれ食乏ひまなしを認識されたい。

# 岡山遠征記

八木 正己

岡山国体・全日本馬術大会・全日本学生自馬対抗競技大会遠征記  
昭和三年

十月十日桑園駅より、洋孝・北嶺・北楡・北京の四頭（国体出場馬は、洋孝・北嶺の二頭、北京・北楡は全日本学生自馬にのみ出場）は、一路岡山へ向つて出発致しました。帯広畜大の国体出場馬四頭は、別日程で発つことになっていたので、札幌関係のみが単独出発となつたわけです。三年目の高木君と二年目の荻原君が貨車に付添い、私は貨車には乗らず、急行で貨車より先に着くように岡山に向いました。

馬匹が岡山に到着したのは、十三日夜九時頃で、岡山駅には、国体兼内所が出来ておらず、また連絡もよくとれていなかったようです。手取取りしましたが、無事岡山大学会場へ次の日、連れてゆくことが出来ました。馬公共は皆元気で、初陣の北京も心配した程でもなかった。国体が二日からで、我々が一番手で、地元新岡も大いに書き立てていたので、異郷の慰めとなり

漸く岡山へきたのだという感じがした。厩舎は板厩で岡大教養部横の岡大馬術部と隣り合わせにある大きな建物の内部をタル木で、仕切つた簡単なもので、下がコンクリートという雑はありましたが、屋根はしっかりとしたもので、板厩としては良い方でしょう。収容力は約一〇〇頭、翌日は一日休ませ、軽く引き馬程度、翌十五日には、十三日夜名古屋よりかけつけた横田君と四人で、三十分程、馬場で軽く騎乗し、そのあとで、岡山大裏の山に登つてみました。というのは、学生自馬のストレッチとで、その山がコースになるとのことでしたので、馴れさせる意味で、十六日は、丘を流れてくるちよつと大きな川で、旭川へ、水浴に連れて行つた。十九日に鎌田先輩が到着し二十日には、出場選手が全員到着し、他地区も続々到着し、大会気分が大いに盛り上つた。他県の馬は、馬格が良いので、練習では、ちよつと、有身が狭かつたが、洋孝の鎌田先輩、山崎君、北嶺の堀川さんと自馬陣の整調もどうにか順調に行つた。洋孝はちよつと体調不十分だったか、普断の飼育管理が悪かつた為らしい。帯広の馬もその同整調が、好調の様でした。一般賢与馬、高枝賢与馬の送手も体調良好で、適当に調子を上げていった。オ一日目、二二日は、一般自馬複合競技の予選（障害飛越）と一般自馬中障害が行われ、洋孝の鎌田氏は、

無事複合の予選を通過しましたが、北嶺の堀川さんは、老令のせいもあり、オ一、オ二障害は通過したのですが、オ三で、拒止を喰い、(今回の団体は国際規定によつた)中障害も同じ様なケースで、残念ながら失格しました。他県の馬は、若くて非常に能力もあり、非常な競り合いが予想され、洋孝をもつてしても、立ち打ちでできない感がありました。オ二日目に複合の決勝と高枝自馬の中障と丙馬場があり、鎌田氏が十位、山崎君(札幌北)が中障でクモキリ(帯畜)に騎乗して二位、馬場は一位となりました。とにかく、調教程度が随分向上しており、複合競技においても障害飛越では全く差がつかず、馬場運動の成績がそのまま順位に表われ、今後の自馬育成に関する問題の難しさが痛感されました。

オ三日目の一般自馬六段飛越は、北嶺が堀川さんの騎乗で出場しましたが、一米二。より始め、二完飛し、一米四。の時、三番目のバー落下し、非常に北嶺の調子が良かっただけに悔まれた。一米六。完飛が二頭(東京個人所有のバリーナと農大の高緑)も出て、北嶺の時代は過ぎたことが、身にしみて感じられました。同日、一般貸与馬トナメントがあり、準決勝まで、札幌の田中君と私が組みオ一戦は、あやうく勝つことが出来、オ二戦で調子を上げ決勝に残った。オ四日目

二十五日に一般貸与馬の決勝が行われ、更に酪農大の小出君が加わり、岡山県と対戦したわけですが、田中君と小出君が無過失、私が、相手が麻緑(麻布)で失叔したあと、同馬に乗り、一落でゴールすることが出来、ゴールしてから落馬するという茶番はありました。が優勝できました。団体観戦中痛切に感じたことは、障害調教が非常に高度に進んでいるということ、特に、東京、大阪、神戸は目を見張らせるものがありました。

続いて、中一日おき、二七日、二八日と全日本馬術大会が同地で行なわれ、北嶺で高木君が中障甲、恩田さんが、六段、私が洋孝で中障甲とサンジヨルジユに出場しましたが、北嶺の中障甲は、高木の奮闘も通わず、オ三障害で三拒否失权に終りました。六段飛越は、団体で好調の兆がみえたので期待したのですが、準備運動不足もあつて、オ一回目飛越、一米三。に匂い、馬体がつまり気味ながらもオ四障害まではどうにか、いったのですが、オ五、オ六を前肢で落下し敢えなく遂げえませんでした。北嶺の限界が、否でも応でも見せつけられた瞬間でした。洋孝の中障甲は、私もあまり騎乗しておらず自信がなかつたが、とにかく落下せぬように頑張つたのですが、オ十往復障害一米一。を往きに前肢で落下し、復する時、障害復旧までタイムアウト

トというわけで、つまらぬタイムロスがあつて結局一  
落で減点六四秒で、荒木雄豪氏のオーキットと同タイ  
ム九位となりました。これで翌日の選抜中障の出場権  
を得たわけで、これは最高一米四〇、最低一米二〇の  
細数七個のピュイッサンスで、ちよつと洋孝では難し  
いと思ひ迷つたのですが結局出場し、才二、才四、才  
五落下、才七で一拒止と三落一拒止、十五点減点で十  
三位でした。この大会で特に目についた事は、大障害  
選抜中障害で優勝、中障害甲で五位と九位という成績  
を上げた荒木雄豪氏のオーキット号による人馬一体、  
馬の騎手に対する絶対的服従を如実に見せた礎越の妙  
技でした。これが良いのか悪いのかは、我々が批評す  
るのには、若輩すぎますので、出来ません。

続いて十一月一日、二日には全日本学生自衛隊対抗競  
技大会が行われ、北大代表の志水（北楡）、清水（北  
涼）、岡田（北嶺）は着々とその整調に好果を上げ、  
当日に臨んだわけですが、競技は調教審査、野外騎乗  
余力審査の総合判定を競うものです。また各大学三頭  
が一種目も失権がなければ、団体成績も自動的に判定  
されるものです。オ一日目十一月一日は調教審査と野  
外騎乗が行われ、調教審査では北嶺の岡田さんが、  
馬場で経路を忘れ暫し馬を停め、思ひ出すまで考え込  
むというユーモラスな場面が演ぜられました。北楡

は順当な成績を上げ、一三八点満点で六五位でした。  
北涼は過去二度馬場での場外失権がありますので慎重  
に慎重を重ね、駈歩が逆手前に出たり、頭を上げたり  
惨憺たるものでした。失権だけはせずに済みまし  
た。調教審査を終えた馬は五分間隔で野外騎乗に出発す  
が、これは走行距離約七千八百米、障害個数は、六〇  
（一〇〇米のもの十六個で、ほとんど標高二、三〇〇  
米の山（岡大の裏山）を登ったり、降ったりの相当激  
しいコースで北嶺等バテないかと心配されましたが、  
岡田さんが悠々と、常歩を充分入れて走行しゴールの  
時は五分後に出了馬が二、三メートル後に迫るとい  
う競り合い（？）でした。六分程のタイムオーバーで  
ゴールしましたが、アブさんは、ひざ打撲傷を受け、  
心配されましたが大丈夫でした。北楡は才一障害で四  
拒止失権で相変らずアツアの面目を發揮してました。  
イン氏も非常に腹を立てていました。如何とも仕方が  
ありません。才二日目は雨が降り、馬場は水が溜りコ  
ンクリシヨンは北大にとって有利（？）となつた。北  
楡は先を見越して棄権、北嶺は二障害二拒止失権（学  
生自馬は国内規定で行つた）、北涼はアブ（清水）さ  
んが、昨日の打撲の痛みを押しての出場だけに、悲愴  
なものでしたが、幾つか拒否、回避がありました。減  
点六〇点程で遂にゴールすることができました。今回

の遠征での唯一の大きな収穫はこの北京の成績でした。これで自馬の競技における今後に希望の見通しを立てる上に大きな役割を果たすわけです。詳しく書けばまだ／＼ありますが、字数が限られておりますので、この位で押さえておきましょう。学生自馬に三頭揃って出場したのは今回が初めてですが、道乗馬連盟の好意で北京・北榆を国体・全日本馬術大会出場馬の輸送に便乗させて頂いたことは馬術の振興の意味も含めて感謝に堪えません。また市内先輩諸兄には多大な御支援を頂きまして改めて御礼申し上げます。更に一致協力して下さった部員諸兄姉の今後の活躍を期待致しましてペンをおくことにします。尚戦績の詳細は別掲がありますので避けました。

一九六二年十二月二十五日

## 学生選手権

恩田 正臣

我々、北大馬術部は、今輝やかしい戦績を残して、昭和三十七年をおくり、栄光の新年を迎えます。三十七年は貸与馬競技においては向うところ敵なし、破竹の勢を示し特に国立七大学定期戦の連続優勝と全国学

生馬術王座決定戦での優勝をすることができました。これは、最上級生が多数最後まで熱心に練習を続け、固結のかたかつた事も理由の一つとして上げられますが、何よりも、我部が伝統をもち創立されて以来、多くの先輩方によつて育てられ、連綿として続いてきた努力が、今やつと機会を得て集大成されたと見るべきだと思います。我々は更にこの努力を続け、後輩に伝えなければならぬと思います。

さて私に与えられた役割は、団体戦の王座決定戦の一週間後に行われた学生選手権で勝ちそこねた私個人から勝てるなどと思つてはいませんでした。……今年には選手権の方法も変わり、馬場馬術を障碍飛越とを全く切離して別々の選手権を競ぶことになりました。……馬場と障碍と両方に出場する選手は、全国で四名しかおらず、従来のような複合形式では行いませんでした。

障碍飛越は、十二月二十二、三日、世田ヶ谷の馬事公苑で、馬事公苑繋養馬と関東の各大学馬術部の馬を兼ね、全国五地区から三十二名の選手が参加して行われました。試合前の新例の予想では、優勝は、関東一位の伊藤（青学大）難馬乗の農工大田中、大石、関西の神久（立命大）、石井（同志社）、前田（関学大）等

によつて争われるといわれていたのでそれを讀んでみ  
そかに今に見るといふ闘志がわいてきました。

試合はトーナメントで、二名づつで、二頭の馬にのり  
つぶし合ひで準決勝まで行い。決勝戦は、三試合を勝  
残つた四名により四頭の馬を用いて総当りのリーグ戦  
といふ国際競技の貸与馬形式で行われました。二十一  
日に、馬場馬術の競技終了後抽選を行い、私はCブロ  
ックで一次予選には関東一位の伊藤(青学大)とあた  
ることになりました。彼とは馬場の試合でも同じ馬群に当り  
彼は四位に入賞し、私は落選を喫しています、同じCブロックには、前田(国学大)  
石井(同志社)等の同西の強豪がひしめいています。

その晩馬群と選手

を研究してみたところどうみても一次予選が一番のヤ  
マ場であると思つてそれに勝つために全力を尽くすこと  
にしました。なすべきことは、自分の体を試合の時に  
最高の調子にもつていくことと馬を研究することとし  
た。使用される馬は、セントエー(馬事公苑)と桜冠  
(日大)でしたので早めに会場に行き、馬事公苑の取  
負の方や、木村さんに会つて、馬のクセと調子を教え  
てもらいました。桜冠は、先の王決に出て来て北大の  
志水君がうまく乗つています。伊藤君が桜冠の前段、  
私がセントエーの前段で試合が始まりました。伊藤君は王  
決の時に荒れた難馬桜冠をうまく乗つて二十一点、私  
のセントエーは、十九点の減点、お互に後段になると、

馬の調子も良くなり私の桜冠が四、五点、こゝで私は、  
相手が一つ區失を犯かせば勝てる有利な立場になつた。  
しかし、最後にセントエーに乗つた伊藤君は、私では  
もておまし気味だつたこの口のかたい馬を見事にのり  
こなし、満点でゴールするに見え私も負けることを覚  
悟しようと思つた時、最後から二番目の障碍を後段で  
ひっかけて落下しました。これにより、わずかの五分  
の差で勝星を拾うことになりました。二次予選は、石  
井(同志社)と当りました。使用馬は、法月(法政)  
と月雪(青学大)でどちらも王座の時にクセを調べて  
あり、又むづかしい方の月雪の後段をとつたので、伊  
藤君との時より楽でした。才一日を終つて準決勝に進  
む八名は、大石(農工大)、福島(日大)、平郡(日  
大)、氏向(帝畜大)、杉山(同志社)、沢井(甲  
南大)、丹羽(中央大)と私でした。  
最初は障碍飛越は、波乱があるからもしかしたら……  
という程度の気持しかありませんでしたが、準決勝に  
残つてみると、よし、いつちようやつたらうか、と  
いうフアイトがわいてきました。準決勝では杉山(同  
志社)と当つた。この時の馬は、法月と光和(明大)  
どちらもくせは調べてあり、私自身の調子もよく運に  
のつて、いよ／＼決勝戦に進むことができました。  
決勝戦に進んだ者は、Aブロックから福島(日大)、

Bプロック平郡（日獣大）、Dプロック丹羽（中央大）  
そしてCプロックから私でした。

決勝戦は、四頭の馬を使い、連続して四頭の馬に乗る  
ので相当な体力が要求されます。しかも前日からす  
で八頭の馬にのり、飛越した障碍の数も百有餘。この  
時こそ夏の合宿でやつたマランソンの効果が現れます。  
四人か四頭の馬で乗った後、五分間休み、又次の馬に  
乗り換えるという方法で進められました。使う馬は、  
白雲（中央大）、藤枝（学習院大）、桜烈（日大）、  
栗早（農工大）、障碍各路は、四頭を連続して使うの  
で回数も減らして九障碍、十二飛越しかし高さはぐつ  
と上り、最高一米四〇。四頭の馬はいづれも関東の精  
点馬ではあるが、昔城の競技とは高さがちがうからわ  
からない。四頭の中では、おさえるのがむづかしい桜  
烈と口がかたく競技経験の浅い栗早が問題だと思いま  
した。この四頭では大きな減点は考えられないから小  
さな減点で勝敗が決まる。だから最後の四頭まで乗つ  
てからでなければという結果になるかはわからない  
と思いました。

出場順番は、四回とも私が一番で始めました。日替は  
馬格の大きな、能力のある馬でトロクターの血が混じ  
っているらしく、豪快な速歩で一米二〇位は乗でした。  
一段目が終って、どうにか無過失でゴールしました。

他の三人は、一コあるいはニコづゝ落下。しかし馬が  
ちがうのだから自分がその馬に乗つたらやはりそうな  
るだろうと思ひ。兎に角どの馬でも減点を最低にとど  
めるように乗ろうと思ひました。

二段目の藤枝では残念ながら騎手の随伴の誤りから最  
終障碍を落下して減点三、三段目の桜烈は、前段に拒  
止があつたので準備運動中に意識しすぎて怖車で馬を  
入り込ませすぎて、準備運動場で拒止をされた。再行  
してもまた拒止、応援していてくれた人をはらくさ  
せたが、その時、森本先輩が、馬にまかせて静かに乗  
れ、と忠告してくださり、その通りにスタートして満  
点でゴールすることができました。

こゝまで終えて私が減点三、丹羽減点九、平郡二十九  
福島三十五でした。しかし最後に残つた栗早は、四頭  
の中で一番減点の多かつた馬で、丹羽は目枝の馬だけ  
に、見事満点で乗りこなしました。他は平郡十二、  
福島二十六と、落下と拒止が目立つていました。先に  
栗早を満点で乗りこなした丹羽は、この馬を、一畑づ  
つていぬいに抑えて飛ばせていましたのでそれを見習  
うことにしてスタートしました。前段で拒止の多かつ  
たカブル障碍を慎重にとばせ、次の右への鋭角回転も  
更に慎重にと、内方へよる馬を外へふくらませるため  
に反対姿勢で回転しましたが、これが傘取りになつて

しましました。というのには、反対姿勢で回転した為、  
体勢を整えた時には、馬の体が伸び切って前進気勢の  
み盛んでした。それまで慎重にモンテ式に力を貯えて  
踏切らせていたのが、こゝで出来なくなり馬にまかせた  
時には、馬は自分で両歩を合わせられず、一步踏み込  
んでしまいそれでも飛ぼうとしましたが、肩が障壁に  
ふれ止まつてしまいました。その後トリプル障壁で二  
落下してしまい減点一〇、今までの三頭で減点は三三  
だったのが、一挙に十三点にねつてしまいました。帰  
つてきてから森元先輩や、付添つてくれていた志水君  
達が、まあ、相手も満点では帰らないから、減点  
一〇だけで良かったよ。とかなぐさめてくれましたが、  
基本通りに乗れば失敗せずに済んだものを、ちよつと  
した怠りから失敗してしまつたことが悔やまれてなり  
ませんでした。丹羽君が藤根君で満点で最終障壁を笑  
顔で飛越しおえた時は、我が北大陣は、本人よりモ、  
志水君、小栗君、八木沢君達の方が、唇をかみしめく  
やしがつていました。私自身は、四頭の馬に乗り終え  
たばかりで、まだ有で呼吸をしているうちは、それほ  
ど残念と思わなかった（思う余裕がなかった）が試合  
が終つて成績が発表されるころになつて、折角全力を  
あげて戦いとりこぼしなく進んできて、ついに不注意  
から自滅してしまつたことが悔まれてきました。優勝

するということとは、色々の条件が最高にそろつてな  
れることで、むづかしいことだと思ひました。  
しかし考えてみれば、始めから果して決勝まで残れる  
かどうかはわからなかつたのが、ともかく二位に入賞  
したということは、実力以上の成績を得たことでそれ  
だけでも満足せねばならないことも知れない。幸運に  
恵まれていたのにチャンスを生かせなかつたというこ  
とのみが残念です。  
最後に、学生選手権に初めて参加してみても、馬場馬術  
はともかく、障害馬術に因しては、我々北大馬術部は、  
全国のトップレベルにあるとうぬぼれでなく云える  
と思ひます。我部の誰が出場しても決してひげをとらな  
いと思ひます。馬場にしてもいま一歩です。  
東京を離れた地方勢は不利だということも、いますこ  
し練習方法を研究し、絶えず中央の技術を吸収する努  
力を続けければ問題は解決できると思ひます。  
障壁に限らず、馬場の方の選手権も、これからの諸君  
に是非かちとつてもらいたいと思ひます。そのため  
私も及ばずながら微力をそそぎたいと思ひます。  
もう一つ最後に、この度の学生王座ならびに学生選手  
権のためにいろいろお世話していただいた先輩諸兄な  
らびに関係者の皆様は紙上を惜りて厚く御礼申上げま  
す。



# 無題

四年 清水 洋

これから述べるとする記事は「部報」などに載せてもらつて他大学などに配られるとちよつと困るしるもので、これは北馬部員各位が夜眠られぬときに書いてもらへば結構、なせならあまりに馬鹿げていてこれを読み終る頃にはウトウトと別の世界に入りはじめると受けあひだから。

とにかく小生の馬術部生活の集大成をこの切でやつた方が身の為だと二年生の某君もすむことだし、小生もそう思うので、四日酔いのアルコール潰れ脳みそから小生の四年生時代の重なる事件を拾つてミュータイセイをやつてみよう。

まず断つておくが小生元末アダ名が示すごとく四年生の中ではちよつとはかり脳内部の配置が他の連中と異つていて、へもつとも他の連中の中でもつとみどいのもいるが、部のオーソドックスな面からはこれまたちよつと離れた存在であつた。よつてここに書かんとする話もまずウラバナシ的になることは女の子を見るより明らかなることであらう。

今年是最上級生となつた為か、試合などにもたがだが

出場の巻に輝き、日本各地をドサ回つた。まずは五月二十日であるが帯広畜産大学の馬場の横でカン／＼照りの下文字通りホサれた日であつた。おかげで色黒ともなり健康そうにも見え結構なことであつた。この日は帯広との定期戦六名戦のところ *Margificent seven* とか称して四年生七人も行つたんだから仕方のない話。シニア戦に勝つたので小生も帯広くんたりまでワザ／＼ピクニックに来たかいがあつたというものだ。とにかくこの頃から我々 *magnificent seven* に勝利の女神がほほえみかけはじめたと思われる。

アエー今週は会場を福島に移しまして、ここ福島市市民会館よりロート製菓提供十人抜きのご自慢今週最初の挑戦者は北馬村の志水インさんで歌は森繁久弥さんの船頭小唄ではどうぞ、パチ／＼／＼てなことをいっていい若い者が騒いでいたのが六月三十日の夜福島のアブクマ祭の一室であつた。この夜ばかりはキマテン合戦に出ているオエラ方は除いた他の連中は酒場のまじりに大きな声で氣勢を上げていたものだ。次の日からの試合に連続連勝したのも、この夜我々の奇声に彼ら他大学の連が腰を抜かし、肝賢の靴に役に立たなかつたものとみえる。くだらんことばかり書いて肝賢のその試合の名前を早くおしえろと書われる吾人におしえてやるが驚ろくな、とにかく長つたらしいの

である。幸いインクもたつぷりとあることだし、東北  
北海道学生馬術大会兼全日本学生馬術王座決定戦東  
北北海道予戦大会とまあこういつた次者。

次は帯広での道大会なのであるが、この試合だけは  
あんまり面白いものではなかつた。自馬に弱く賞与馬  
に強い今日の我部としては、自馬に關する限り頭が痛  
い。帯広には障礙馬についてみれば今のところカツ  
リ差をつけられたといつても過言ではなからう。この  
点責任逃れの様で申訳ないが後輩諸君に期するほかな  
い。もつと勝つた話を続けようではないか。帯大戦が  
ある。今年は国立七大学総合体育祭の才一回が北大主  
権で行われ、札幌を中心として大規模に行われたが伝  
統の馬術は見事北大がもつた。この頃には勝つたの  
にも慣れてあまり感激もしなかつたがね。A Bさんは  
例によつてホサれたり、満点馬に乗せてもらつたりゴ  
ンゴンしていた。そして先輩の誰かさんが「満点馬を  
満点で帰してくるのは実に難しいことだ、これをやる  
選手がいなければ団体の試合は絶対勝てない」と言わ  
れるのを聞いてニヤツとしていたものだった。A Bさ  
んはこの試合の爲の合宿には試験のため最後の二日し  
か参加出来ず、その二日も初日だけ鞍上の人となつた  
だけで、あとの一日は二日酔の頭を抱えてかランとし  
た合宿所でウン／＼言つていた。そのとき忽然と眼前

に現れた麗人も誰だか見分けがつかず、今日は頭が痛  
いからダメだと言つて帰したものがあつた。その人の  
誰だかを知り大あわてで電話で平あやまりであつた。  
努力のカイあつて振られずにすんだものの冷汗三斗の  
思いであつた。そのとき誓つたことはかこれまた泣か  
せる。以後絶対酒類は飲みません」とね。

ユイユイ。アーバカホーイ、アンドスローフランチ  
ユイユイ。ノーノー。アイアム。ア。クレバー。ホ  
ーイ。ボン。この一見ヒマラヤ語みたいなことをさ  
けんでいたのが我々の「はつかり」の中の出来事な  
のである。才三者が見れば文字通りバカホーイ達だと思  
つたことだろう。とにかくよせばいいのに函館本線  
から上野に着くまで日本語を使つてはならないとい  
うことになつた。こうなる今日頃のボキヤブラリーが物  
を言うことになり、我々四年生の中で最も無口になつ  
たやつはの○さんであつた。

マイノマイノの内に列車は上野に着き、東京に私邸を  
持つ危にそわ／＼イン／＼。そこで夜合宿所（一高同  
窓会館）に集ることを約して散り／＼になつてしまつ  
た。彼らは久し振りの自宅でフンゾリ返つたことだろ  
う。この一高同窓会館たるや古色蒼然としていて、い  
やはや劇解寸前の建造物であつた。今にして思えばあ  
のとさもし地震でもあれば我々北大選手一同家の下敷

きとなり、あえない最後をとげたことだろう。辛い地震もなく三晩泊って毎朝起きるなり馬鞍を整え鞭などを振りながらいい気になつて馬事公苑まで通つたものだ。

さて王座決定戦のことである。その朝はよく晴れていて選手一同眠り足りたといつた顔をしてまずは戦力は充分に貯えたりといつた状態であつた。オ一戦に策大と当つた訳だが、他の大学にもホコイやっはいるもので、彼が準備馬場にて練習中あまりとはし過ぎて本馬場の方へとび出た。あえなく場内失権、これで北大は何なく勝つた。そのときA Bさんいみじくも曰く、この失権は後々までも我々の勝利を導いてくれる女神となるに違いない。要するにツギはじめたということである。だがA Bさんこのときはホサしであつた。

オ二戦農工大ともやつてみたが、あまり強い方ではなかつたらしい。北大が勝つてしまつた。

その夜は御想像の通り大騒ぎ、原とホンさんのプロレスなどの余興もあり腹の皮が未だによじれつはなしである。

二日目は、前日農工大を破つたせいから馬場付丘をウロくしていても観客や他大学の連中がちやんと道をあげてくれるよつになつたから嬉しいものだ。試合

には勝つものである。

今日のオ一戦は金沢大とである。これは何なく勝つた。だがホンさんがドヂを踏んだらしく元氣なくホサツとしていた。でも次の闘争戦が始まるやはじめから終りまで応えん席でガナツていた。こういう所は後輩諸君は見習わなければならぬ。いよく闘争戦、敵は三勝しているだけに絶対負けられない試合である。それにテレビにも写ることだし、この一戦に我々の四年間の努力がチーム精神が結集されねばならないと連中のふらしくひきしまつたものだ。へたまにはこういう事もある。A Bさんがトツプで出た。これには訳がある。そうだ。誰か馬鞍をやつた奴曰く、この試合最も重要だからトツプになるとどうしても緊張し勝ちで思わぬ不覚をとることもあるから、こういつた場合には図々しい。図太い。あんまり感じない。とにかくわかちやいない奴が最適だということ。A Bさんがトツプといふことになつた。そうだ。彼嘆けくことしきり。メシモ喉に通らなかつた。そうだ。

王決優勝してよかつた。札幌駅での出迎え団の景氣のよさは一生忘れられないだろう。何でも景氣のいいのはいいものである。

志水 一 充

さて、もう四年間の馬術部生活も、終末に近くなつてきた。そして私の馬術も、これで終るにちがいない。これだけの情熱を傾むけて、馬に乗る機会は今もうあり得ないだろうから……。

馬術部を去るに当つて、その感慨は人により種々であると思う。これから先、騒擾な現実の日々に追いつたてられて、豊かであつた馬術部生活を忘れてしまふことはないであらうか。自分の心の変化が、いささか心配であるけれど、私はこの部生活の住々しい記憶を大事にしていきたいと思う。

先日、アルバムを整理していて、思い当つた事だけれど、ほとんどの写真が部生活のものであつた。私の周囲には、自分の可能性を信じて、多くの事に、積極的にゆらぎかけている人達がいた。が自分にとっては、部生活が学生生活であり、他の生活はある程度、犠牲にならざるを得なかつたが、それで良かったと思つて満足している次才だ。誰にも負けない豊かな学生生活であり、素晴らしい日々であつたと思つている。

ともかくにも、私は馬術部を去らねばならない。

そして去らねばならないことは、感傷をぬきにしても自分にぽつかりと空洞があいてしまふ事は察し得ない。自分は馬術部生活から、何を得たかは、これから先の自分自身に答えてもらわねばならないし、それに多くの期待をして部を去らうと思う。

この稿を想する時、自分の馬術論でも書こうと張り切つていたのだが、この際おきらめることにした。といつても何を書いて良いのか、わからないのが本音だ。思うに私達の部は、専任のコーチがいないので、人様々の乗り方をし、それが各々の一家をなしている様である。だから、某君のは、先輩の誰々の流儀を、某君のは、某先輩の流儀をくんでいるという具合に見てわかる様な気がする。これからまた後輩諸君も種々の流儀を探していけることだろう。でも最近、馬術に対する考え方をしつかりと探っている人が少ない様に思う。毎年その様な人が減つていく様な気がしてならない。先輩の方々は確実なものを持つておられたと思う。この棟な傾向にともなつて、とせば良い主義の安易な障碍馬術に墮して行く気がしてならない。新馬が多く、二蹄蹴をさえ踏む馬がいなくなつた事も原因となつていると思う。新馬が多く、これから我々の手で調教して行かねばならない大切な時期であるからこそ、多に馬術を研究しなければならぬと思う。

新馬を購入し、残して行かれた先輩の方々の切なる望みは、自馬での成績をあげる事なのだから、幸い今年に王決で優勝出来たが、これからの馬術界は自馬大会に重点が置かれてくるのであるからその時に、かなへの軽重を向われない様、必していただきたい。それには各人が積極的に求めて行かないと、北大が地方にあるだけに、中央から、差をつけられてしまう。ほんとは頑張っていただいたい、馬術家というものは、えてして独断的で、高慢であるようだ。どうか自分の馬術を厭しく見詰め、謙虚に努力していただきたいと思う。試合で雑馬を乗りこなすことだけが馬術ではないのだから。

話は変わるが、考えてみると、全く傑作な日々の連続であつた。今思い出してみても、ハタと膝をたいて、笑い出したくなる様な事件が数限りなくあつた。この傑作な仲間には、我ながら、種々と手を焼いたものの、最後まで手を切らず終つたのは、いとも不思議である。

馬術への並々ならぬ素質を持ちながら、志中にはしつて、どつと病の床に臥した物理学者で、理路整然と物事を分析していくかたわら、生来の怠慢さが彼の人間性を救つていた市川瑞彦君、又一秒の時間も無駄にす

る事を嫌い、窒息してしまふ程、自分の生活を秩序正しく運行しようとしながら、一番無駄な時間の多かつた堀川芳男君、常にヒヨウヒヨウとして、何を考へているのか、さつぱり見当のつかない男、静かな湖面に石を投げつては、その波紋を後にして身をひく、渦中の人となることを嫌つた原重一君、アメリカンスピリットを提唱したり、ランセルに心酔したり（残念ながら数学的頭脳は持合せていなかったが）、女性関係のたえることのなかつた、甚々無意味な事件に現身をやつず、行動の人、清水洋君、二十年後は拓銀の頭取まぢがいなしといわれながら、卒業同匠にして、モーパッサンを繙くといつてから、人生の虚像を嘆き、切なき恋に身をこがして、すべてのものを超越した岡田征至君、常に女性の愛にうねつゝ、馬術に専念したため、我々より一年遅れざるを得なかつたが、最後迄、匹夫の勇をふるう恩田正臣君、女優という大物を収らつて、哀れな恋の末路をとげ、暗室で我々の写真を焼いては、もうけている人生枯れ落葉の宮崎健君、エルマーガントリーを地で行く、すさまじい男、小出秀達君、我々男性に引けをとらぬ一人の Grant 田中節子女士、当番をさぼつて「泣いて愚しよくを切る」の如く、泣く／＼首を切られた数々のエピソードの持主、実吉峯郎君、そしてしんがりをつとめるのもおこがましいが、

最後まで人の善意と誠意を信じ(ふいごいことには、自分是一片の善意も誠意も持合せていなかったが)甘えてきた私と、象愚の策りであつたが、この我々と長い間、交際して下さつた先輩諸兄、後輩の皆様には深く感謝します。

## 街乗の記

八木 多賀子

師走の声を聞いてまもなく、街ゆく人も思わずふり返る見慣れない一行が通り過ぎていきます。八人ならぬ八頭の馬で、降りかかる雪をも、ものともせず元気にそして多分楽しそうに、ある中学校の前では血の気の多い男生徒のさかんな声援(「マジかしら」)を受け、路上では多くの人の好奇に満ちた目を全身に感じ、少々照れくさく、又少々誇ちりげに一路藻岩へと軍(つ)を運んだのでした。

医大の地は殆ど見たこともない建物ばかりなので、私より良く知っている馬が勝手に動いてくれるのにかせて、あちこちキヨロ／＼しているうちに、いよいよ目的地のふもとに到着。腹帯をしめ直し、又、こち

らの気持ちを引きしめる。家がなくなるまでは並足。その後は、顔に前の馬が跳り上げる雪のかたまりを受けながら駈足で一息に登りつけた。

馬は人間同様かなり競走心の強い動物であることを今更ながら知らされ、馬の上で体をこわばらせてしまつた。でもそんなことは大したことではない。銀色に輝いた雪の上を走るあの気分は何とも云い様がない。また八頭の馬がずらりと並んで山を駈け上る様子はとても素晴らしい。残念ながらそれを見るチャンスは一度もめぐつて来なかつたが、本当に、高い所から下を見下すのは悪くないものである。ただ馬に乗っているだけでもしかり。

藻岩山から札幌の町を見下しながら一休み。なんと汚い街だろう。自分もそこで、その汚い空気を毎日吸っていると思うと背筋が寒くなる。雪に対するロマンティックなおもいも泡の如く消えていった。清潔な札幌を早くここから眺めたいものである。

何か妙なものを体内に注いで、いい気分になつていた *gentle man* が二、三人おいででした。

「馬に飲ませたら？」といたづら心が湧いてきました。たが……。

それよりも私は何とぼんやりしていたのだろう。連日の遠出で疲れているのに文句も云わず私車を樂しま

せてくれた主人公産に、何も持つて来なかつたとは、前の日には覚えていたのだけれど当日になつたらすっかり忘れてしまった。本当に悪いことをしてしまいました。来年はこんなことのないようにします。

人間も馬も元気をとりもどしたところで双子山を越えて円山へ。この頃になると照れくさいも何もあつたものではない。街ゆく人のことなど殆ど気にならなくなつた。坂道を歩いてゐる時、なんだか右手と右足、左手と左足を同時に出して歩いてゐるようなおかしな感じがした。

そんなにも上の方にも住宅が侵入してきてゐるのには少なからず驚かされた。自家用車が欲しくなるだろうといらぬ心配までしてきた。広い北海道もだんだん狭くなりつつあることを考えさせられた。

円山へぬける前の競馬は壮快だつた。(道路に出ても續けていたので後で叱られたけれどもすぐ忘れぢやつた。) その外の時はさつぱり前へ出て行かなかつた。バスもこの時ばかりはバカみたい(？)に走つて、前の馬にぶつかるのではないかとひやく／＼させられた。でも私を落すこともなく止つてくれたから一安心。

それから札幌神社の付近で自由行動・木立の中を通り抜けて参道に出た。何も障害物が無いので安心して走ることができた。のは私。一縷に走つてゐると思つ

て横文、木と木の間の狭いところを走つたとか。眼鏡はぶつ飛び顔は枝にひつかかれ、お気の毒な状態になつてしまいました。でも軽くて幸いでしたが、戻つばに出たので駈足を少し使つたのだけれどバスは一向にしてくれぬ。あきらめてバスの好きなようにさせておいた。技量の至らなさが身にしみる一時でした。

その後今日の街乗最後の競馬となつた。ゴールは道路の手前。とは云うものの私にはどこが道路なのかさつぱりわからないまま他の馬の後をついてスタートした。(なる程車の通つてゐる立派な道路がありました)。最後だというので馬の方も一生懸命走つたのだろう。かなりの汗が光つてゐた。私達も熱かつた。今日の街乗で最高潮に達した人間も馬も今は整然と一列になりなつかしの古栗へ足を追つていきます。延々二時間半にわたつた街乗も今や終りを告げんとしています。みんな楽しかつた街乗に感慨無量になつていたのでしようか。それとも疲れてしまつたのでしようか。口も開かずひたすら厩舎へと何つております。

# 想ふこと

原 重一

昭和三十七年師走、又去つていくシーズンを、振り返る時となりました。僕等にとつては、最後のシーズンでした。四年間の馬術部生活の集大成が、念願だった王決の優勝という形で表われたことに、限りない喜びを感じます。送手の一人として、この優勝に参画しえたこと、幸運だったと思います。今、四年間の生活を回顧する時、さまざまなお出立事が、この優勝、大トロフィー、優勝旗の前に、すいこまれていくようです。

「女性に限らず、人とつき合う時、その人間を知るためには、四六時中つき合えんと解らんものだよ。」

「そうだよ。」なんてことをしやべりあつたことがありました。合宿という代物は、まさに四六時どころか一週間も、どうでもいような奴等と、面をつき合わせていることになり、いろんな事が解つちあうんだなあ。『消灯』のどら声が、やむかやまずか、とてつもなくでかい声で寝ごとをいい出す奴、ペアでないし、どうしても寝つかれない奴、それに、ね起きの悪い奴、

—— A Bさん、インさんなんて、今じゃ当然のよう

な名前も、合宿あつての副産物。小さいな胸に、こよいも開くは、情熱の花………と、一世を風びした歌声をはじめて聞いたのは、あの龍宮城と間違えられたような、濃粧軍の二階、フライの時間、疲れた体を横たえていた時だった。草木もなびくが如く、フラジルへ、フラジルへと、大きな夢を抱いて通うのも、合宿が出発点だったな？、「え、A Bさんよ」「あそこのコーヒー、うまいんだ」「とにかく、コーヒーだよ」「ウーん、そうだよ。」

合宿の集大成といえは、やつぱり、王決出発前の一週間のそれだろうか。はじめ試合が、八、九日だったのが、急に一週間延期になり、「それじゃ、合宿やるうや。」で、右に曲つたり、左におれそうになつたりしたあけくの合宿であつた。集まつた面々、堀川先生を先頭に、例の四年目連中、王沢さんも、多忙な実験を、この際と、万障くりあわせての参加、それに八木君、小島君の精鋭九名、とぎすまされた精鋭。とにかく、言うこと、やることうるさい連中はかりの合宿だから、まづ「もう、この二階で泊まることはないと思つた、雪の中で、合宿やらせていたげけるなんて、俺達はついてるねえ、うれしいねえ。」うれしそうなのは一つとしてなく、あるのはストーフが一つ。あの広い部屋に九枚のフトンがポツン、ポツン……。



隅の方でストロブが、ゴン／＼。朝の寒いの。寒くないのつて、ほんとうに、まあ寒かった。初日など、落着いて朝までぐつすりねむれた奴なんか居なかつたんじゃないかと思ふね。又この朝が、起きるのがつらい。なんとしてもツラカッタ。目を覚される。フトンの中で、ゴサ／＼起きようか、どうしようか。思ふ、——  
「これから、馬装して、手入れして、あぶみあげ。なんで今頃あぶみあげしなきゃならないの。——」  
「俺は下る」。ねてた方が、よつほどいいや。——  
「おい！ 起きろよ！」  
「んちきしよう、起きてやら、はつとバジヤマを脱ぎすて、——」  
「あ、寒い」

手入れをして、柔軟体操。これが着むと馬上の人となる。こういう時に限つて、一時同半たつぷり乗せていたゞけるから、泣けてくる。この際、手箱も、ホアラ並木もなかつたね。「俺、や——めた」とでもいつて、登降りてさつさと帰つてきてしまいたかつたよ。とにかく、合宿はつづいた。寝つて、朝ははよからけ起こされ、ぼろだし、手入れであぶみあげ、煙にむせたか……。部屋四畳半的ムードのストロブが燃えていねえ、当番にしてやがるんだらう。夜にはストロブを囲んで、ポンちやんの直前前の一件やら、これが東京は銀座、札幌へ帰る一時向前、さるアクセ

サリィ店。「あの、フローチみせてもらいたいだげど」。「こちらが、よろしいと思ひますか、御いくつくらいで、二十代ですか。」「うん、まあ。」「じゃ、これにするか。」「ちなみに店員から客まで全て女性。——に発展するとは知る由もなかつたね。——」  
「どうでもいいような話に、大切な二千円もする——」「サバいうな」つて、ほんとなんだよ。——パイプをむなしくしてしまつたり、ないやうで、結構いろんな事があつたようだ。結果的にみて、この合宿が、まとまりという点からも、きざならしという本来の意味あいかからも、よきものをもたらしと思ひます。それに最後の晩に、一年目の諸君二十名近くがストロムをかけたきてくれたこと。「選手諸兄！ もた／＼するんじゃないよ。」「なんのために俺達がついてるの。」「弁ピンをぶらさげて、皆それが——一杯気分んで、敬効にまくれた、實際うれしかつたよ。茶わん酒をくみかわし、歌をがなり、特設舞台でパントマイムまがいのだ。しもののでたり、一時向ぐらいたつたらうか。引き際も心得ていたよ。」「ニリやあ、下手に帰つて来れないぞ」互いにふんどしをしめなをして、カツスリねたことだつた。

出発の夜、特急でゆつくり遠征出来るのも、相変らず差入れの豊富なことも幸だつた。半次先生、春

藤先生はじめ部員の見送り、それに、まだ直接関係ないような方々にも、だいぶいらしたようです。

この時、意気あいあい、いふ心いさだつたように憶えています。「絶対優勝してくる」といつた、さおつた気持もなく、それでいて、「負ける気はしなかつた」……、たんに、たる心境といつていいのではないうでしょうか。

優勝、そして札幌到着の夜、札幌駅に下りて、部員の皆さんと握手をかわして改めて「優勝したんだ」と強く感じました、あのストームが出来たこと、応援団諸君のはくしゆを受けられたこと、部員一人、一人の笑い、忘れられないシーンです。「テレビをみていて鬼田さんがゴールして、優勝が決まった瞬間、それから、四年目の皆さんの、又、例の自慢話を聞く覚悟をしつかりとつくつておきました。」……泣かせるね——彼等の耳は丈夫になるでしょう。祝勝会、生田先輩の二次軍と、すぐに始まり、以来、私設の祝勝会の連続である。想うことは限りない。何も解らなかつた一年目、部生活と縁を切りたい心境で但部を考えたら二年目時代、そして細く長く生き抜くことを思いたつた頃、帝大戦、女子戦、さらに今年の第一回の国立大学総合体育大会の開催など多忙だったか、それだけに印象に残っているマネーシヤ時代、逆手として、ドジを

踏みつゝ、帯広へ、福島へ、東京へと遠征出来たことなど数多い。四年間部室で、馬場で、あるいは、飲み屋でつきあつた連中と、別れねばならない、淋しい気がする。四年間、馬術を通して知りえた先輩、同輩そして後輩の諸兄、王次のあの優勝の瞬間の感激とともに大切にしたいと思うこと、切である。

## 今年も又かくてありけり

守屋 正

後伐とした部室で一人当番の相棒を待つ。

部員の名札もだいぶ裏になつた。今年も、もう数日で終りだ。ススに曇つた窓越しに又いつからか白いものがちらついている。投草までにはまだ時間がある。寂しさに机の上の日記をめくる。一頁ごとに我馬術部の足跡が印されている。そしてそこからはいろいろな思い出がよみがえってくる。ここに日記からその一部を紹介し、部生活の一断面を描いてみようかと思ふ。

一月一日、当番さん御苦労様、元旦から当番をやる今年はずよい年になることでしょう。「部室内禁酒」なる悪法も解かれ、先輩諸兄口々にかつてなことをわめきあつている。初乗りに左右燈の長さの正しかつた

着はいなかつたとか。

一月二〇日、鍋万に於て新年会、聞かせてちょうだい、花笠音頭。

一月某日、今日は本当に静かな一日でした。一面の白銀の中に伸びるホフラ、遠く雪を頂く手稻山、昼すぎより雪が音もなく静かに舞い落ち、全ての生物が息を潜め北国の冬というよりオトギの国の平和な一日でした。千工笑わすねえ。

二月某日、映画会、愛情の花咲く樹、サッチモは世界をまわる、の爲の作業、午後十時部室集合、三人づつ組になつて街の角々に落ちている(?)看板を集めに廊の中にちつて行く。

二月二五日、寿司楽に於て追コン兼木寮部長送別会兼松本新部長就任式。

四年目諸兄、可愛いリーベとのお別れの日も近い、おつとりとした目、鼻すじの通つた顔、そして会えば頬をすりよせてくるホントに可愛い馬達よ。

三月某日、又当番が回つて来ました。皆さんは今頃試験勉強をやつていていいことだらうに俺は今こんなことをやつていいのだろうか。全く人ごとじゃないぜ。みなさんモトツペらない様頑張つて下さい。

三月某日、今日も又一人先輩離れず、今度はいつ又会えることか。幸あれ。

三月某日、春が来たよ、ネワラ悪いよ、

「靴草をネワラ代りにしといたよ。」「わた菓子をつとにしたとの同じだよ。なりたいね、俺も馬に。」

三月一八日、北大入学者発表さる。この中から何人我が部に入るかな。

三月某日、作業、雪割り、溝掘り、馬糞集め、後学年別雪合戦、二年目に勝利あり。

三月某日、春休みに入る。コンソリ帰るなんてみつともない。大学生なんだからもう望心を起して帰省を急ぐこともないのに。——帰るゲルトなく札幌で休みを過すやつのみかみなり。

四月十日、入学式、雨の中を講習会募集のデモンストレーション、ナヨッピリいい気持。

四月十四日、乗馬講習会始まる。可愛い新入生がたくさん来ました。メンコイネ。

先輩ヅラが出来るので新二年目の出席の多いこと、四月二〇日、女子二人を混える新一年目二六名入部す、今後の活躍は如何。

四月二三日、クラブ会館に於て歓迎コンパ、某末梢曰く、「北大馬術部には三つの良い点がある。

一、どんな恰好をしても一向に気にかけない。  
二、いかにゲルピンでも一向苦にしない。三、メツチ

エンに全然持てず、それを誇りにしている。」とのこ

と、最も三番目は異論のあるところ。しかし、今考え  
てみるとこの伝統は一年目にも引継がれたようである。  
四月某日、春は夜、理学部の前に来たれば冷き水銀  
灯の光の中に幻のごとき老いたるエルムが浮び上る。  
夜空を見上ぐれば、遙かにススキノの空ピンクに染る。  
春とは言え、いまだ名のみ、夜凡はそぞろに身にしむ  
春未だ或々男の子二人、それそれに思いを胸に秘めて  
部屋への道を出る。

四月某日、学生課より新しい布函くる。風呂へ数  
週間行つたことのない某君に初夜が汚されるのかと思  
うと悩ましい。

五月某日、今日から青草刈り、と言つてもやつと  
芽を出したばかり。先輩風を吹かした某君の罵声の中  
に一年目諸君手に傷を負い泥まみれになつて奮闘する  
こと二時間余り。可哀想やらおかしいやら、純情ね、  
いや失礼、御苦勞様でした。

五月五日、今日は子供の日、楽しかつたネ、ほん  
とくに、

五月某日、最近部内にチヤキリス旋風起る。早  
くチヤキリスを卒業してくれんと柄が悪くて困る。

「ウエストサイド」を観ることを禁止すべきだ。

五月十三日、部内競技会、農場の馬も出演して、  
ハン喰い競走、立ち乗り、横乗り、うしろ乗りのメド

レー、ロデオと楽しい一日を過ごす。

六月某日、一年目の某君曰く、練習はこわくて乗  
しい。終了後はなお楽しい。馬君は楽しいだろうか？  
キツと横を落したのだから楽しかつたことだろう。

六月某日、久し振りの五月晴れ、朝日をいっぱい  
受けた手稲山を背に、あたり一面は新緑に萌え清々し  
いカツコーの声の中に馬に乗ることの出来る我々は何  
と幸なことか。

六月某日、札幌祭パレード、神主さんを乗せて市中  
行進、美にシヨウモ

六月某日日曜日、久し振りの雨、乗りに来るやつ  
もなし、部屋に訪れるアホもなし、今日はお馬さん  
連にゆつくり休んでいたがきましよう。

*Morning service* に青草をやつたら大変喜んでくれ  
ました。

六月某日、朝早くから馬の洗濯、みんな驚いたこ  
とだろう。北翔のやつ折角の苦勞も水の泡、砂の上に  
寝ころんでしまつた。カツテニシヤがれ。

七月四日、北海道馬術大会の馬賃車積み明日から  
の当番は来たぞ、

七月某日、夏が来た。ホフラ並木に観光客しきり、  
赤、白、黄、青、緑、……部員諸兄、鼻の下を伸ばす  
なかれ、ウイヒヒヒヒ……

七月一六日、オ一次合宿、本日より帝大戦、女子戦の優勝を目ざし合宿、鏝上げ四〇分、出足快調、コンパには女子部員総出の料理、さすがだったよ、ウー、ン。

七月某日、馬場に砂入る、えつ、これで落馬しても痛くないって？

七月三〇日、帝大戦優勝、勝った勝った、又勝った。

八月三日、北大招待全日本女子学生馬術大会、レセフシヨンにて「まあ〇〇さん、北大へ来てたの」と偶然の再会を喜びあうカツフル二組、こいつはシヤクだった。

同日、パーラー石田屋に於て祝勝会、東久通宮杯で飲むビールの味は忘れられないね。

八月五日、オ二次合宿、九号、十号とあい続く台風で殆んど練習出来ず、しかし、某君の指導でツイストのうまくなつたこと。

八月一九日、東京より川口宏一氏来部、コーチに当る。いつもはさとりきつた顔をしている上級生も、今日はかりはしほられる。

しかしイカシタね、先生のスタイル、絶もあんなのを着てみたいつて？、中身かお前じゃね、静かな優しいあの声で三日間指導していただき、お陰で悪は良

くなつたね。

八月二十六日、オ三次合宿、泥棒が入つたがさゆやられる。いつもゲルピンで通っている部員諸兄が三千円、五千円という盗難届けを出す。ホントかしら。

九月某日、競馬場バイト、全くチヨンボくさいバイト、学校をサボって競馬場なんかに通っていると親が知ったら、さぞ嘆くことだろう。これもかわいい馬鹿のためだものね。

十月某日、岡山へ田体の送手届たつ。「女子の見送りほしいなあ」と嘆くことしきり、アフレな別離であつた。

十月某日、部屋にストリープ入る。寝場の人曰く、「最近フタのじやがいの減り方が早くなつた」とか、なぜかしら。

十月某日、夜もしん／＼と更る頃、やおらドアのさしむ音、カーテンを明けくれば、浮かぶは誰が影、差入れ持ちたる男の子一人、悩み多き胸を迎えつつ現れる。その名……

十月某日、二月に今度はダンスパーティーをやるうという動きがあつたせいとかダンスを習うことはやる。部屋にはめつたに顔を出さない車中にも講習会では毎日会う。全く御熱心なこと。

十一月某日、今晚はとう／＼相棒現われず、

(名前に「く」)

# 住所録

氏名	永井 一天	高松 正信	黒沢 亮助	太素 兼光	松本 久喜	半沢 道郎
	才1代 部長	才2代 部長	才3代 部長	才4代 部長	才5代 部長	現部長
現住所	北大名誉教授 札幌市南2条西12丁目	北大名誉教授 東京都世田谷区松原町4の294	北大名誉教授 札幌市北1条西22丁目	函館高等工業専門学校校長 函館市湯川町2丁目3番地	元北大農学部教授 札幌市手稲町富丘195	北大農学部教授 札幌市北6条西12丁目
備考	千 二一四三五		三一〇五七			二一二二八六

名前	中野 友二郎
卒業年度	昭和4 農科
現住所	長岡農業高校(長岡市油新町475) 新潟県高田市南成町1の33
備考	

氏名	現住所	備考
平山 晴介	飯野産業KK 蕨薮並掛所 京都府纏鶴市北吸 966	
真鍋 雅彦	夏崎市役所 夏崎県諫早市栗口町 675	
中谷 勝紀	飯野重工業製糖工場長 東京都杉並区清水町 246	
向 克市	農林省十勝種畜牧場 十勝国河東郡音更町 同場内	
岩 垣 鉄夫	福島県園芸試験場長 福島県信夫郡平野村	
河 崎 秋三	東京都競馬組合八王子牧場 東京都八王子市高倉町1の553	八王子 191
永 松 四郎	新生興業KK 東京都太田区千束町 771	
藤 尾 金太郎	農業 ブラジル サンパウロ	
武 田 朝男	千葉畜産工業KK 事務 千葉市幕張町千葉畜産工業KK内	千葉(三) 九一六一
東 園 基文 (昭主)	宮内庁侍從職参事 東京都渋谷区八幡通2の23	二三一一二二一 四六一六五六七
田 畑 武夫	田畑産婦人科病院 札幌市南5条西2丁目	

前野 正久	渋谷 西平	滋賀 孟明 (昭11主)	賜田 代子郎 (昭10主)	高杉 直幹 (昭9主)	吉見 一郎	大迫 明德	加藤 英夫	本田 桓康	久葉 昇	植村 勲 (昭8主)
養畜 12	養畜 12	医 12	養化 11	理化 11	養至 11	理化 11	医産 11	工機 10	養畜 10	養畜 10
東京都目黒区中目黒1-82	森永乳業中央研究所長 東京都渋谷区代々木1-22	玉薬品興業KK 東京都港区芝白金三光町364	大同製鋼診療所長 四日市大字赤城2-4	モンサイト化成工業KK四日市工場加工部長 札幌テレビ 札幌市北7条西13丁目	雪印パーラー株式会社 東京都杉並区神戸町1-14	ケミ・ダイズ・リミテッド 藤沢工場長 東京都世田谷区世田谷3の2560	朝日生命 札幌支社 札幌市南大通7丁目	アレス工業KK技術部長 東京都千代田区紀尾井町4の11	兵庫農科大学助教授 兵庫県多紀郡城篠山町郡家375の1	山本マーク工業KK取締役 東京都目黒区麩谷町45
七一ニ〇九七〇六	二九一〇五八八七	四四一〇七八四四	九〇一〇四一六九		三九八〇六九二七	二七一〇七二七一	二一〇二六三一	三三二〇五五二四	〇四三〇三五一一	七三一〇三九〇



氏名	職業	現住所	備考
氏名			
黒天良雄	農經 12	日本長期信用銀行 茨ヶ崎市小和田 4333	二七一〇三三九一 〇六六〇八六七六
森山武雄	医 12	国立岩木療養所長 青森県南津軽郡夜岡町	
石井昌長	農化 13	東京通商産業局石岡アールコール工場 茨城県石岡市元真地 213	
小笠原義顕	工電 13	日本電機K.K. 玉川製造所電波工業部 川崎市宿河原 2223	七二一〇四二〇一 〇四八一三六〇九
小村達夫	農生 13	岡山大学理学部教授 岡山市津島岡山大学 同上内	
楠本勝登	農經 13	人革院東京地方事務所長 東京都杉並区上萩窪ノの 197	五八一〇一七三一 三七一〇七七四一
高井久芳	農畜 13	北海道仙美里農業講習所 北海道中川郡本別町仙美里同上内	
前川静弥	理化 13	日本製鋼室瀬製作所 室蘭市茶津町社宅番外79号	
松平梯	農農 13	日本ビル目黒工場製菓課長 東京都渋谷区景近町 561	
山下亮	農畜 13	広尾村農業共済組合家畜診療所主任 札幌郡広島村字広島	
池内武夫 (昭13主)	農畜 14	中央競場 場長 東京都世田谷区若林町 266	五九一〇五二七一 四一四〇三六一

高木史郎	岡義人	熊沢光	河原清作	伊藤悦郎	石井(昭和秀主)	秋吉照忠	木谷清穂真	西村(昭雅吉主)	中尾敦司	小田晃也
工 16	医 16	農 16	工 16	工 16	農 16	農 16	農 15	理 15	工 15	農 14
茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	興立水産工業高校	秋田県湯沢市字西松沢392	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	茨城県東茨城郡茨城町駒渡1
										熱海三四四一

氏名	職	現住所	備考
中曾根 賢	農 16	道方農務部畜産課 札幌市南水上市町 46	
半沢 宏	工 16	北大工学部助教 札幌市北6条西12丁目	二〇二二八六
福光 幸彦	医 17	福光小児科 札幌市南7条西4丁目	三〇一八四三
岡田 光天 (昭16主)	工 17	札幌市役所建設部長 札幌市南7条西4丁目	監督
白取 善三	農 17	大成軽トラック取締役社長 弘前市大字薬師堂字熊本19の2	
山根 乙彦	農 17	札幌大学農学部助教 札幌市立川町2丁目泉堂アパートノ号	
大戸 進	農 18	三井木材砂川工場 北海道空知郡砂川市比本町三井木材住宅	
平井 宏知	工 18	日本電機放送器工業部技術部放送機器課 東京都町田市南大谷字玉川学園 641	七二一〇四二〇一
小池 栄一	工 18	北海道電力土木部計画課 札幌市南14条西9丁目	五〇一一一一
稲葉 恵一	農 19	日本油脂KK佃工場 大阪府高槻市南園町 337	
大手 英夫	理 19	日華油脂KK銀座營業所 東京都新宿区西大久保2の219	五七一〇五六八一



氏名	職	現住所	備考
下飯坂 隆	農畜 28	北大日高実験牧場 北海道釧路内郡釧路町御園	
鈴木 敏天	農畜 28	吳幌高枝 網走郡吳幌町東2条北1丁目森方	
渡植 貞一郎	農畜 28	北大農学部 札幌市北26条東2丁目	
葛野 保	農畜 28	北海道農業試験場根室支場 北海道標津郡中標津町道根根室支場内	
永井 重翁	農畜 28	管切乳業KK、伊保内工場 岩手県九戸郡九戸村長興村才2の70同上内	
磯谷 晴男	農畜 28	大沼魚市場KK 牧岡市么条町么条	
古谷 昌司 (昭26、27主)	農畜 28	古谷製菓東京工場 埼玉県浦和市別所西野台1210	浦和(0881) 五二七三
吉本 正	農畜 28	宮城農業試験場 仙台市原町小田原榭江29同上内	
福島 務	医 29	北大産婦人科教室 札幌市緑似町225	
阿部 晃一郎	工 鉦 30	庄反金屬鉦山嶺之舞鉦業所 紋別市鴻之鷺清明業	
鎌田 正人(柳亭) (昭28、29主)	農畜 30 (獣)	鎌田牧場 北海道浦河郡浦河町西隈別	

荒川 清	小長谷 善高	千白 哲生	加藤 昌太郎	斎藤 茂俊	加藤 奇	岡本 光	大久保 (昭利主) 茂	石塚 和夫	正盛 玄之	田中 若
経 32	水産	獣 31	理物 31	農 経 31	獣 31	農 生 31	獣 31	獣 31	理動 30	工 治 30
札幌市南8条西24丁目	札幌トヨタ自動車KK 札幌市南21条西8丁目 源新方	東京都世田谷区弦巻町3の621	日本中央競馬会保健研究所 横須賀防犯大学内	防大応用物理学教室 岩見沢市4条西5丁目 及川方	北海道信用農協連岩見沢支所 岩見沢市4条西5丁目	神戸市立王子動物園 神戸市兵庫区熊野町5の19の5	東京都文京区雑司ヶ谷61十条製紙雑司ヶ谷寮 十条製紙KK研究所	空知郡奈井江町取前 白石方 曾印乳業KK 同上前	北海道新冠郡新冠村農業共有組合 札幌市北8条西18丁目	北大理学部動物学教室 札幌市北8条西18丁目 同上前
		四二一〇一九五一	補賃 740 (内 四四九)							

氏名	現住所	備考
櫻本 幸人	和歌山県立医大細菌学教室 和歌山市字嶺389 松居方 道庁米谷支庁	
岡部 満雄	不二越鋼材工業KK 福井市下北野町	
斎藤 実	日本揮発油(四日市市) 三重県四日市市同上内	
宮沢 (昭三主) 寛	農林省中国種畜牧場 岩島県加茂郡河内町入野同上内	
伊藤 亮	癌研究所病理部 神奈川県横浜市江野北町 2557	
乾 直道	本島県飯山保安監督部支所 山口県宇部市上宇部郡篠田公務員住宅ノ号	
栗原 康	札幌医科大学教室 札幌市北一条西4丁目	
松田 環	北海道炭鉱汽船KK石炭化学研究所 東京都杉並区天沼ノの292 荻窪北友寮	三九一ノ二六〇七
渡辺 俊弘	北海道電力滝川発電所 滝川市西町107 北豊和光寮	
柴田 久男	滝元新聞報道部 札幌市南一条西ノ丁目同上内	
生田 (昭三主) 一		
経 34		
工 電 34		
工 志化 33		
医 察 33		
工 械 33		
理 動 33		
獣 33		
農 林 産 32		
経 32		
農 畜 32		
理 植 32		

菅原 照雄	樋口 (昭正主明)	千葉 幹天	工井 敦	山本 智	中村 (長美幸)	村山 哲	粟津 健太郎	片山 静子	佐伯 隆二	田中 紀介
文哲 34	法 34	歎 34	農 34	水 34	經 34	經 34	水 35	文 35	農 35	農 35
北大文学部研究室 札幌市北18条西4丁目	東京都品川区役所税務課 東京都世田谷区上馬町2の13 中央競馬会中山競場診療所 千葉県船橋市古作町2/7中山寮 ホクレン農業协同組合連合会酪農部 札幌市北4条西ノ丁目 同上内	首形中学(札幌市利尻町首形字日ノ出町) 同上内	同上内	同上内	東京都中野区鷺の宮6の782 北海道電力KK 北見支店営業課 北見市美芳町 北友寮 銀座屋 製パン 札幌市南1条西17丁目	静修高校講師 札幌市北2条西23丁目 森永乳業KK目黒工場製造課 東京都太田区馬込東2の1113	木村会社 静岡県清水市宮代町6			
	四九一〇一五一 (内15)	〇七三〇三五一一			九九一〇四一四九				七一一〇三一一四一 七七一〇七八二〇	



氏名	現住所	備考
長谷川 邦夫	岩崎通信機KK総務課 武蔵野市吉祥寺290 浅原方	三九一〇二二三一 〇二二二〇二七八七
本橋 幹久	トウサン牧場 在フラジル (鳥取市上町20の1)	
森本 (昭博主) 次	松下木材KK開発部 東京都葛飾区新宿区3の593	六一〇二五四六 六九一〇五二七〇
大場 (昭善主) 明	販売新庫 東京都江東区深川三好町2の16 志水方	
吉田 享	高砂熱学工業KK技術部 東京都中野区鷺宮1の201	二五一〇七二二一
湯浅 正之	伊藤忠商事KK 東京武蔵野市西窪字耕地伊藤忠商事被身寮	
河原 紀夫	アジア航空測量 東京都芝田村町5の7 同上内	
稲垣 務一	大同製鋼KK 愛知県知多郡横須賀町大字加木屋字甲鹿持18大同製鋼知多寮	
佐藤 典子	北大医学部 札幌市北夕条西13丁目	
高林 (高階) 子	北大医学部 札幌市北23条西3丁目 長岡方	
小山 毅	北大大学院 札幌市北6条西10丁目 林靖子方	

		木塚 信次	伊藤 公一	田柳 啓久	森 弘幸	広岡 暢夫	鶴見 好博	千葉 祐記 (昭36主)	玉沢 一晴
		養畜 37	医 37	医 37	工 37	養畜 37	理 37	養畜 37	医 37
		下関市長府町前八幡	北大医学部 札幌市南5条西12丁目	日本工化ホールド	名百屋市北区辻町一丁目 大隈工所 大隈工所	茨城県西茨城郡岩間町押辺 全取運 全取運 大隈工所	江户川化学KK 東京都台東区上野榎木町23 三菱江户川化学	福冈市上呉服町20 才一生命ビル内 雪印乳業販売課	札幌市南6条西8丁目
						二六三 二六四			

氏名	市川 (昭37瑞彦主)	岡田 征至	思田 正臣	小出 秀蓮	清水 洋	志水 一允	田中 セツ子	原 重一	堀川 巧男	宮崎 健	八木 (昭38正己主)
職	理物	法談	農畜	医 医	農畜	農林産	農工	農 農	農畜	文 露	理 生
現住所	札幌市北7西13進修寮 ②2091	札幌市北17西3 小南 方	札幌市北7西12 米沢寮	札幌市北6西12 豊文荘	札幌市北12西4 和カラ荘	札幌市北29西8 福井 方	札幌市北8西2 北楡荘	札幌市北14西3 甚多 方	札幌市北7西12 秋田寮	〃 北24西4 朝日荘	〃 北17西3 小南 方
帰省先	上川郡吳珥町西町四丁目一番地	根室市衣本町4の1	群馬県山田郡毛里田村矢田堀	大阪府阿部野区美幸町1の38	大阪府泉南郡岬町茨輪	東京都江東区深川三好町2の16	東京都目黒区柿の木坂 824	東京都文京区大塚坂下町99	東京都中野区上高田1の96	大阪府南河内郡狭山町西池尻 437	夕張郡長沼町24区

萩原 雅典	小川 東二	菅野 弘	大木 誠示	入沢 雄機	三津 清一郎	寺江 則子	田村 雅英	高木 佑太	小島 武	荒木 伸也
経 2	経 2	農畜 2	理数 2	小製造 2	教 3	農畜 3	工合成 3	農畜 3	医薬 3	水造洋 3
北17西3 下野方	南4西23 立花幸方	北18西6 関アパート	札幌市北7西7 山崎信次郎方	函館市港町23 北大北展察	榆影察	札幌市大通り西23丁目	南大通り西17 山崎方	北19西7 有阪方	札幌市北13西3 工藤方	函館市港町23 北大北展察
四国高松市兵庫町	岐阜県大垣市神田町2丁目	東京都世田ヶ谷区玉川 奥沢町3の61	東京都世田ヶ谷区玉川	埼玉県大宮市吉敷町2の60	茨城県土浦市荒川神591	補河市大通り5	函館市杉並町46	愛知県瀬戸市西蔵所町3	茨城県土浦市東崎町754	熊本県下益城郡成麻町隈狂532

栗井 恒雄	吉田 孝男	横田 肇	守屋 正	松永 武彦	小野 佑亮	牧 竜子	野田 行文	滝沢 南海男	滝沢 迪子	御坊田 賢一	氏名
工業教 2	農 2	理 2	工精 2	工 2	理 2	医 2	獣 2	理 2	文 2	工 2	学部 部員
“ 南8西18 住吉又夫方	札幌市南19西9 大久保方	恵迪寮	札幌市旭町11-63 中村方	恵迪寮	“ 北15東4 加藤方	“ 南1西19 ① 350575	“ 南6西16 小倉文作方	“ 北7西8 エルム荘	札幌市北11西5 ① 7139394	恵迪寮	環境 任 所
函館市松川町33	兵庫県伊丹市本町5丁目566	名古屋市千種区池園町2の21	横浜市神奈川区上反町2の22の1	静岡県焼津市港町225	名古屋市東区東外堀町2の3	同上	大阪市東区大手前町 ① 214613	前橋市岩神町萩北240の2 ① 214613	同上	埼玉県浦和市常盤町10-20	帰省 先

温水 善三	高橋 昭夫	高野 文彰	呉 富士彦	近藤 晋十郎	黒沢 道雄	河合 隋夫	加藤 孝志	片寄 謙	梶山 泰爾	小栗 紀彦
理 /	理 /	理 /	理 /	水 / 産	理 /	文 /	医 /	理 /	水 / 産	理 /
恵庭寮	" 北8西7 炭盤寮	" 北7西12 米沢寮	" 白石町中央 小笠原方	" 北19西5 嶺方	" 北19西4 桶本方	" 北19西4 桶本方	" 北14西15 石川窪方	札幌市北16東5 佐藤五三郎方	恵庭寮	札幌市北7西12 秋田寮
宮崎県北諸県郡高崎町下新田	青森県八戸市山伏小路6	山形県米沢市小国町 2165	東京都世田谷区下島町2の66	名古屋市中区古渡町5の16	静岡県磐田市新河原町	静岡県磐田郡豊田村一言	秋田県南秋田郡五城目町盛田	大阪府北河内郡茨真町	東京都世田谷区代田1の367	東京都目黒区月光町163

山内 一真	柳谷 祥生	八木沢 好正	八木 多賀子	森 義信	猿尾 英彦	藤井 毅	深尾 勝子	羽柴 敏彦	根岸 正充	沼田 光弘	氏名
文 /	文 /	理 /	文 /	文 /	水 / 産	理 /	法 4	理 /	理 /	理 /	学部 部年
札幌市南2西5 ⑦ 33303	恵迪寮	恵迪寮	札幌市北6西13 北大女子寮	恵迪寮	" 北22東9	" 北11西2	札幌市北6西13 北大女子寮	恵迪寮	恵迪寮	恵迪寮	現住 所
同上	香川県高松市天神前158	東京都目黒区倉町47	山越郡八雲町末玄町213	東京都北区田端町253	同上	大阪府枚方市中振2400番地		名古屋市中区白陽町3の10	群馬県高崎市柴崎町608	留萌市幸町2丁目	帰省 先

# 物故者

富 堅 裕	岩 崎 扁 一	九 鬼 誠 之 助	愛 甲 愛 舟 家	沢 田 鶴 松	辻 村 憲 吉	氏 名
"	"	"	"	昭 和 4	元 配 屬 將 校	卒 業 年 度
14	10	8	6	工 機		學 部
農 業	工 電	農 化 昭 6 主 任	農 業			
山 本 義 則	佐 藤 誠 龜	菅 周 威	石 川 正 吉	下 条 親	永 田 敏 雄	氏 名
"	"	昭 和 15	在 學 中 死 去	昭 和 14	在 學 中 死 去	卒 業 年 度
15	15	15		農 畜		學 部
理 化	農 業	農 畜				

		山 村 勝
		理 /
		札 幌 市 北 7 西 12 米 沢 寮
		山 形 県 米 沢 市 上 花 沢 片 町



氏名	卒業年度	学部
佐藤 誠	昭和15	農学
永倉 寛	16	工学
蛸崎 愛男	16	農学
小林 誠平	17	農学 昭17主幹
福本 途夫	17	理化学
氏名	卒業年度	学部
山村 亨	昭和19	農学
坪 達信一	23	医学

以上、部の記録、各学部の名簿等により調べ、修正しましたが、何か不備な点が御座いましたら、或いは変更された際には、ぜひ御一報下さるようお願い致します。

へ賢よりつづく

フラチノ、一人獲のわびしさよ。

十一月二十五日 学年対抗障害飛越において、十五  
鞍目、初めて障害を飛んでゴールした豪傑あり。「北  
宗は良い馬だよ」とは百鞍乗ってゴールの至駿の無い  
勇の言、察してやつて下さい。

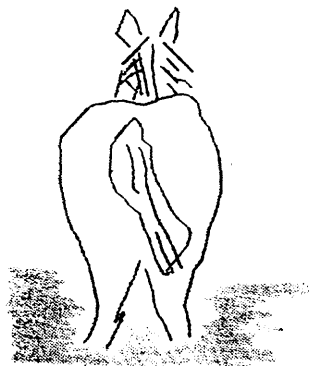
十一月二十九日、競馬場バイトで馬一頭買入、更に  
大きなやつですが、おとなしい馬です。北瓊号と  
命名、某君曰く、これじやとび乗りがニヨーモ一。

十二月某日、街乗始まる。誰の行いが悪いのか雨  
天を決定、旭丘高校へ突入す。女生徒に「サインして  
ノ」。「キヤー、アツチむいてノ」と言われてその氣に  
なつて乗りまわし、後日校長から呼び出しあり。

ハイそれまでよ。

十二月十五日 王決優勝、送手の皆さんホントに  
よく出来ました。

遠くから足音が聞えてきた。やあ「怪くなつて申し  
訳けない。」と相棒が雪まみれになつて入つてくる。  
じやあ、このへんで投草をやつて、圍爐、にでもラ  
メンを食いに行くとしようか。



## 編集後記

飼育関係の記録を、載せしめり

十月にこの仕事を受けもつてもうニヶ月半、まだ原稿が集められぬとは不思議な程だ。一番の障害は試合である。先ず岡山の三つの大会、福島の学生選手権予選、仙台の東北戦、東京の王決、最後に学生選手権、と連なる試合に上級生は津軽の海を行ったり来たり、原稿を書いてもらいう暇が無い。その内に冬休みになり、ついでに帰省してしまふ人も出る始末。しかし岡もなく年も変ろうという今になつて、何とかまとまるという希望的観測がでざるようになつた。

必要事項以外は希望者だけ載せる方針のせいか、下級生のものが少くなつてしまつた。もつと整い気持でどんどん応募されんことを。

又、今度はお出まるとかたつたのですが、次号からは先輩・顧問・同好会の方々からも原稿を寄せていただき、この部報を北大馬術部関係者全体の交換の場としてゆきたいと思ひます。一筆ものせんと思われる方は何時でも結構ですからお送り下さい。又、原稿を依頼しました折にはよろしく御協力下さいませう。

末筆ながら、お急しいところ無理矢理原稿を催促しました方々、又原稿の整理その他を助けて下さつた方々に感謝いたします。

(水野記)